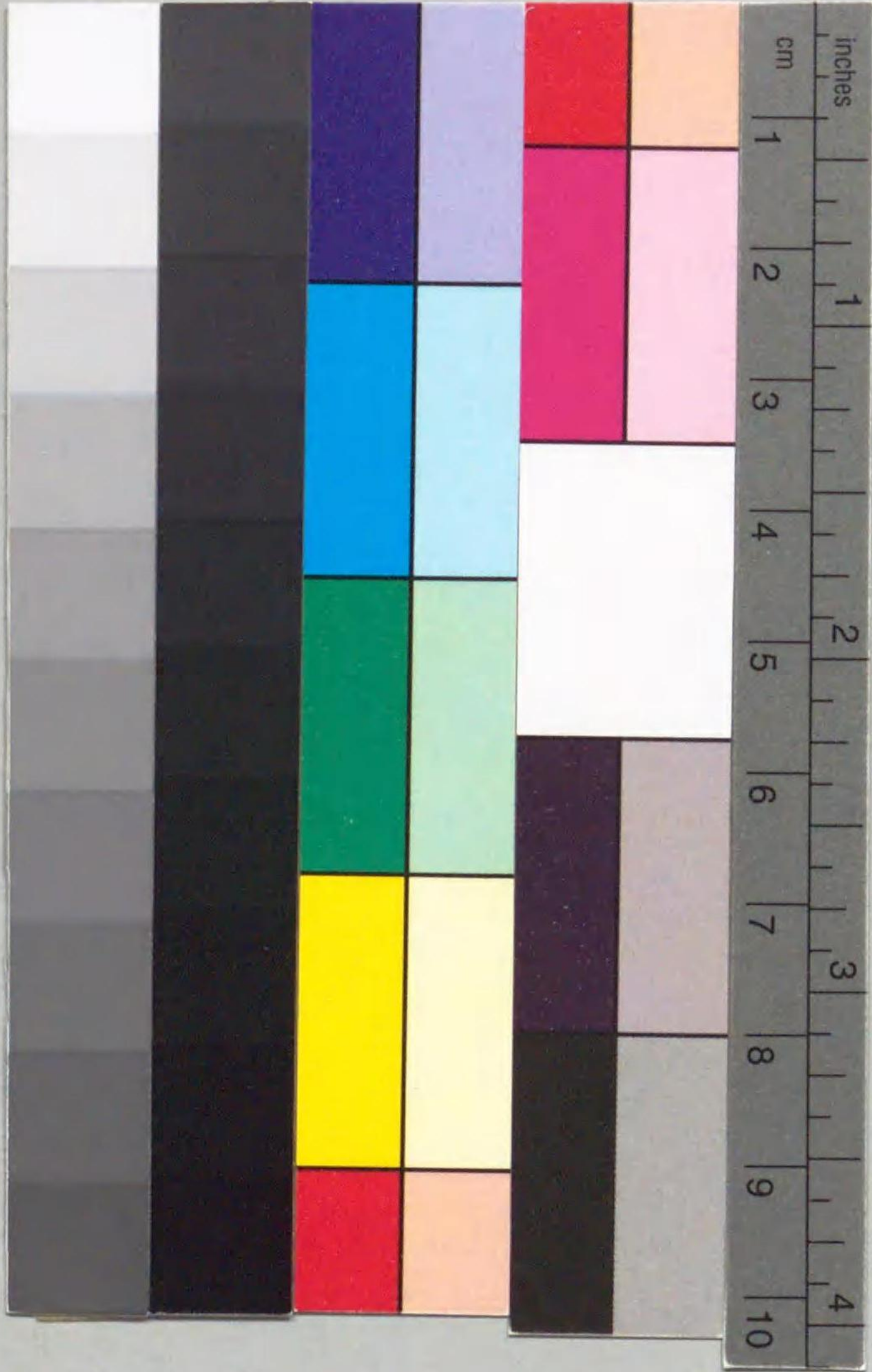


915.6
A414s



少
丁

東京都千代田区丸の内二丁目十二番館六号四二室
芳澤中國記念事業財團
電話(28)四一〇八番

芳澤中國記念事業財團

3219



3219
2019年
正

支那
語



218261

915.6

915.6
A4148
II



文藝
叢書



512761

薄田淳介氏に

I. Okugawa.
Jan. 1929.

自序

「支那游記」一卷は畢竟天の僕に恵んだ(或は僕に
災ひした) Journalist 的才能の産物である。僕は
大阪毎日新聞社の命を受け、大正十年三月下旬
から同年七月上旬に至る一百二十餘日の間に
上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を
遍歴した。それから日本へ歸つた後「上海游記」
や「江南游記」を一日に一回づつ執筆した。「長江
游記」も「江南游記」の後にやはり一日に一回づつ

執筆しかけた未成品である。「北京日記抄」は必
しも一日に一回づつ書いた訣ではない。が、何
でも全體を二日ばかりに書いたと覚えてゐる。
「雜信一束」は晝端書に書いたのを大抵はそのま
ま收めることにした。しかし僕のジャアナリ
スト的才能はこれ等の通信にも電光のやうに、
—— 少くとも芝居の電光のやうに閃いてゐる
ことは確である。

大正十四年十月

芥川龍之介記

支那游記目錄

上海游記

一 海上	起 一 頁
二 第一瞥 (上)	起 三 頁
三 第一瞥 (中)	起 七 頁
四 第一瞥 (下)	起 一〇 頁
五 病院	起 一三 頁
六 城內 (上)	起 一七 頁
七 城內 (中)	起 二一 頁
八 城內 (下)	起 二四 頁
	起 二七 頁

九 戲臺 (上)	起 三〇 頁
十 戲臺 (下)	起 三四 頁
十一 章炳麟氏	起 四〇 頁
十二 西洋	起 四四 頁
十三 鄭孝胥氏	起 四八 頁
十四 罪惡	起 五三 頁
十五 南國の美人 (上)	起 五七 頁
十六 南國の美人 (中)	起 六〇 頁
十七 南國の美人 (下)	起 六四 頁

十八 李人傑氏	起六九頁
十九 日本人	起七三頁
二十 徐家滙	起七七頁
二十一 最後の一瞥	起八三頁
江南游記	起八七頁
前置き	起八九頁
一車中	起九二頁
二車中 (承前)	起九四頁
三 杭州の一夜 (上)	起九六頁

四 杭州の一夜 (中)	起一〇〇頁
五 杭州の一夜 (下)	起一〇四頁
六 西湖 (一)	起一〇八頁
七 西湖 (二)	起一一三頁
八 西湖 (三)	起一一七頁
九 西湖 (四)	起一二一頁
十 西湖 (五)	起一二六頁
十一 西湖 (六)	起一二九頁
十二 靈隱寺	起一三三頁

十三	蘇州城内 (上)	起一三七頁
十四	蘇州城内 (中)	起一四二頁
十五	蘇州城内 (下)	起一四七頁
十六	天平と靈巖と (上)	起一五一頁
十七	天平と靈巖と (中)	起一五五頁
十八	天平と靈巖と (下)	起一六〇頁
十六	寒山寺と虎邱と	起一六五頁
二十	蘇州の水	起一七〇頁
二十一	客棧と酒棧	起一七四頁

二十二	大運河	起一七八頁
二十三	古揚州 (上)	起一八二頁
二十四	古揚州 (中)	起一八六頁
二十五	古揚州 (下)	起一九〇頁
二十六	金山寺	起一九四頁
二十七	南京 (上)	起一九八頁
二十八	南京 (中)	起二〇三頁
二十九	南京 (下)	起二〇七頁
長江游記		起二一三頁

小穴隆一畫

伊上凡骨刻

神代種亮校

上海游記

一 海上

愈いよ東京とうきやうを立つと云いふ日に、長野ながの草風そうふう氏が話はなしに來た。聞きけば長野ながの氏も半月はんげつ程後には、支那しな旅行りょこうに出でかける心算しんざんださうである。その時長野ながの氏は深切しんせつにも船酔ふかまひの妙薬めうやくを教おしへてくれた。が、門司もんじから船ふねに乗のれば、二晝夜ちゆうや経たつか經たない内に、すぐもう上海しやんはいへ着ついてしまふ。高たかが二晝夜ちゆうやばかりの航海かうかいに、船酔ふかまひの薬くすりなどを携ひ帶たいするやうぢや、長野ながの氏の臆病おくびやうも知るべしである。——かう思おもつた私は、三月くわつ二十一日にちの午後、筑後丸ちくごまるの舷梯げんたいに登のぼる時ときにも、雨風あまかぜに浪立なみだつた港内かうないを見ながら、再またびわが長野ながの草風そうふう畫伯わくはくの海うみに怯おそなる事ことを氣きの毒どくに思おもつた。

處ところが故人こじんを輕蔑けいべつした罰ばちには、船ふねが支海せんかいにかかると同時どうじに、見る見る海うみが荒あれ初はめた。同じ船室せんしつに當あたつた馬杉君ますぎんと、上甲板じやうかんぱんの籐椅子とういすに腰こしをかけてゐると、舷側げんそくにぶつかる浪なみの水沫しみ。

が、時時頭の上へも降りかかつて来る。海は勿論まっ白になつて、底が轟轟煮え返つてゐる。その向うに何處かの島の影が、ぼんやり浮んで来たと思つたら、それは九州の本土地つた。が、船に慣れてゐる馬杉君は、巻煙草の煙を吐き出しながら、一向弱つたらしい氣色も見せない。私は外套の襟を立てて、ポケットへ兩手を突つこんで、時時仁丹を口に含んで、——要するに長野草風氏が船酔ひの薬を用意したのは、賢明な處置だと感服してゐた。

その内に隣の馬杉君は、バアか何處かへ行つてしまつた。私はやはり悠悠と、藤椅子に腰を下してゐる。はた眼には悠悠と構へてゐても、頭の中の不安はそんなものぢやない。少しでも體を動かしたが最後、すぐに目まひがしさうになる。その上どうやら胃袋の中も、穩かならない氣がし出した。私の前には一人の水夫が、絶えず甲板を往來してゐる。(これは後に發見した事だが、彼も亦實は憐れむべき船酔ひ患者の一人だつたのである。)その目まぐるしい往來も、私には妙に不愉快だつた。それから又向うの浪の中には、細い

煙を擧げたトロオル船が、殆ど船體も没しないばかりに、際どい行進を續けてゐる。一體何の必要があつて、あんなに大浪をかぶつて行くのだから、その船も當時の私には、業腹で仕方がなかつたものである。

だから私は一心に、現在の苦しさを忘れるやうな、愉快な事計り考へようとした。子供、草花、渦福の鉢、日本アルプス、初代ぼんた、——後は何だつたか覚えてゐない。いや、まだある。何でもワグネルは若い時に、英吉利へ渡る航海中、ひどい暴風雨に遇つたさうである。さうしてその時の経験が、後年フリーゲンデ・ホルレンデルを書くのに大役を勤めたさうである。そんな事もいろいろ考へて見たが、頭は益ふらついて来る。胸のむかつくのも癒りさうぢやない。とうとうしまひにはワグネルなどは、犬にでも食はれると云ふ氣になつた。

十分ばかり経つた後、寢床に横になつた私の耳には、食卓の皿やナイフなどが一度に床へ落ちる音が聞えた。しかし私は強情に、胃の中の物が出さうになるのを抑へつけるのに

苦心してゐた。この際これだけの勇氣が出たのは、事によると船酔ひに罹つたのは、私一人ぢやないかと云ふ懸念があつたおかげである。虚榮心などと云ふものも、かう云ふ時には思ひの外、武士道の代用を勤めるらしい。

處が翌朝になつて見ると、少くとも一等船客だけは、いづれも船に酔つた結果、唯一人の亞米利加人の外は、食堂へも出ずにしまつたさうである。が、その非凡なる亞米利加人だけは、食後も獨り船のサロンに、タイプライタを叩いてゐたさうである。私はその話を聞かされると、急に心もちが陽氣になつた。同時にその又亞米利加人が、怪物のやうな氣がし出した。實際あんなしげに遇つても、泰然自若としてゐるなどは、人間以上の離れ業である。或はあの亞米利加人も、體格検査をやつて見たら、齒が三十九枚あるとか、小さな尻尾が生えてゐるとか、意外な事實が見つかるかも知れない。——私は不相變馬杉君と、甲板の籐椅子に腰をかけながら、そんな空想を逞くした。海は昨日荒れた事も、もうけろりと忘れたやうに、蒼蒼と和んだ右舷の向うへ、濟州島の影を横へてゐる。

二 第一瞥 (上)

埠頭の外へ出たと思ふと、何十人とも知れない車屋が、いきなり我我を包圍した。我我とは社の村田君、友住君、國際通信社のジョオンズ君並に私の四人である。抑車屋なる言葉が、日本人に與へる映像は、決して薄ぎたないものぢやない。寧ろその勢の好い所は、何處か江戸前な心もちを起させる位なものである。處が支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸しては、大聲に何か喚ぎ立てるのだから、上陸したての日本婦人などは、少からず不氣味に感するらしい。現に私なども彼等の一人に、外套の袖を引つ張られた時には、思はず背の高いジョオンズ君の後へ、退却しかかつた位である。

我我はこの車屋の包圍を切り抜けてから、やつと馬車の上の客になつた。が、その馬車

も動き出したと思ふと、忽ち馬が無鐵砲に、町角の煉瓦塀と衝突してしまつた。若い支那人の馱者は腹立たしさに、びしびし馬を殴りつける。馬は煉瓦塀に鼻をつけた儘、無暗に尻ばかり躍らせてゐる。馬車は無論顛覆しさうになる。往來にはすぐに人だかりが出来る。どうも上海では死を決しないと、うつかり馬車へも乗れないらしい。

その内に又馬車が動き出すと、鐵橋の架つた川の側へ出た。川には支那の達磨船が、水も見えない程群つてゐる。川の縁には緑色の電車が、滑かに何臺も動いてゐる。建物はどこちらを眺めても、赤煉瓦の三階か四階である。アスファルトの大道には、西洋人や支那人が氣忙しさに歩いてゐる。が、その世界的な群衆は、赤いタバアンをまきつけた印度人の巡査が相圖をすると、ちやんと馬車の路を譲つてくれる。交通整理の行き届いてゐる事は、いくら眞眼に見た所が、到底東京や大阪などの日本の都會の及ぶ所ぢやない。車屋や馬車の勇猛なのに、聊恐れをなしてゐた私は、かう云ふ晴れ晴れした景色を見てゐる内に、だんだん愉快な心もちになつた。

やがて馬車が止まつたのは、昔金玉均が暗殺された、東亞洋行と云ふホテルの前である。するとまつさきに下りた村田君が、馱者に何文だか錢をやつた。が、馱者はそれでは不足だと見えて、容易に出した手を引つこめない。のみならず口角泡を飛ばして、頻に何かまくし立ててゐる。しかし村田君は知らん顔をして、すんすん玄關へ上つて行く。ジョオンズ友住の兩君も、やはり馱者の雄辯なぞは、一向問題にもしてゐないらしい。私はちよいとこの支那人に、氣の毒なやうな心もちがした。が、多分これが上海では、流行なのだらうと思つたから、さつさと跡について戸の中へはひつた。その時もう一度振返つて見ると、馱者はもう何事もなかつたやうに、恬然と馱者臺に坐つてゐる。その位なら、あんなに騒がなければ好いのに。

我はすぐに薄暗い、その齋裝飾はけばけばしい、妙な應接室へ案内された。成程これぢや金玉均でなくても、いつ何時どんな窓の外から、ピストルの丸位は食はされるかも知れない。——そんな事を内内考へてゐると、其處へ勇ましい洋服着の主人が、スリツパア

を鳴らしながら、氣忙しさうにはいつて來た。何でも村田君の話によると、このホテルを私の宿にしたのは、大阪の社の澤村君の考案によつたものださうである。處がこの精悍な主人は、芥川龍之介には宿を貸しても、萬一暗殺された所が、得にはならないと思つたものか、玄關の前の部屋の外には、生憎明き間はごせんと云ふ。それからその部屋へ行つて見ると、ベッドだけは何故か二つもあるが、壁が煤けてゐて、窓掛が古びてゐて、椅子さへ満足なのは一つもなくて、——要するに金玉均の幽霊でもなければ、安住出来る様な明き間ぢやない。そこで私はやむを得ず、澤村君の厚意は無になるが、外の三君とも相談の上、此處から餘り遠くない萬歳館へ移る事にした。

三 第一瞥 (中)

その晩私はジョオンズ君と一しよに、シエツファアドといふ料理屋へ飯を食ひに行つた。此處は壁でも食卓でも、一と通り愉快に出來上つてゐる。給仕は悉く支那人だが、隣近

所の客の中には、一人も黄色い顔は見えない。料理も郵船會社の船に比べると、三割方は確に上等である、私は多少ジョオンズ君を相手に、イエスとかノオとか英語をしやべるのが、愉快なやうな心もちになつた。

ジョオンズ君は悠悠と、南京米のカリイを平げながら、いろいろ別後の話をした。その中の一つにこんな話がある。何でも或晩ジョオンズ君が、——やつぱり君附けにしてゐたのぢや、何だか友だちらしい心もちがしない。彼は前後五年間、日本に住んでゐた英吉利人である。私はその五年間、(一度喧嘩をした事はあるが)始終彼と親しくしてゐた。一しよに歌舞伎座の立ち見をした事もある。鎌倉の海を泳いだ事もある。殆ど夜中上野の茶屋に、盃盤狼藉としてゐた事もある。その時彼は久米正雄の一張羅の袴をはいた儘、いきなり其處の池へ飛込んだりした。その彼を君などと奉つてゐちや、誰よりも彼にすまないかも知れない。次手にもう一つ斷つて置くが、私が彼と親しいのは、彼の日本語が達者だからである。私の英語がうまいからぢやない。——何でも或晩そのジョオンズが、何處かの

カフエへ酒を飲みに行つたら、日本の給仕女がたつた一人、ぼんやり椅子に腰をかけてゐた。彼は日頃口癖のやうに支那は彼の道楽だが日本は彼の情熱だと呼號してゐる男である。殊に當時は上海へ引越して立つたさうだから、餘計日本の思ひ出が懐しかつたのに違ひない。彼は日本語を使ひながら、すぐにその給仕へ話しかけた。「何時上海へ来ましたか？」昨日来たばかりでございます。「ちや日本へ歸りたくはありませんか？」給仕は彼にかう云はれると、急に涙ぐんだ聲を出した。「歸りたいわ。」ジヨオンズは英語をしやべる合ひ間に、この「歸りたいわ」を繰返した。さうしてにやにや笑ひ出した。「僕もさう云はれた時には、Awfully sentimental になつたつけ。」

我我は食事をすませた後、賑かな四馬路を散歩した。それからカフエ・パリジアンへ、ちよいと舞踏を覗きに行つた。

舞踏場は可也廣い。が、管絃樂の音と一しよに、電燈の光が青くなつたり赤くなつたりする工合は如何にも淺草によく似てゐる。唯その管絃樂の巧拙になると、到底淺草は問題

にならない。其處だけはいくら上海でも、さすがに西洋人の舞踏場である。

我我は隅の卓子に、アニセツトの盃を舐めながら、眞赤な着物を着たフィリツピンの少女や、背廣を一着した亞米利加の青年が、愉快さうに踊るのを見物した。ホイットマンか誰かの短い詩に、若い男女も美しいが、年をとつた男女の美しさは、又格別だとか云ふのがある。私はどちらも同じやうに、肥つた英吉利の老人夫婦が、私の前へ踊つて來た時、成程とこの詩を思ひ浮べた。が、ジヨオンズにさう云つたら、折角の私の詠嘆も、ふふんと一笑に付せられてしまつた、彼は老夫婦の舞踏を見ると、その肥れると瘦せたとを問はず、吹き出した誘惑を感じるのださうである。

四 第一瞥 (下)

カフエ・パリジアンを引き上げたら、もう廣い往來にも、人通りが稀になつてゐた。その癖時計を出して見ると、十一時がいくらも廻つてゐない。存外上海の町は早寝である。

但しあの恐るべき車屋だけは、未だ何人もうろついてゐる。さうして我々の姿を見ると、必何とか言葉をかける。私は晝間村田君に、不要と云ふ支那語を教はつてゐた。不要は勿論いらんの意である。だから私は車屋さへ見れば、忽悪魔拂ひの呪文のやうに、不要不要を連發した。これが私の口から出た、記念すべき最初の支那語である。如何に私が欣然と、この言葉を車屋へ抛りつけたか、その間の消息がわからない讀者は、きつと一度も外國語を習つた経験がないに違ひない。

我々は靴音を響かせながら、静かな往來を歩いて行つた。その往來の右左には、三階四階の煉瓦建が、星だらけの空を塞ぐ事がある。さうかと思ふと街燈の光が、筆太に大きな「當」の字を書いた質屋の白壁を見せる事もある。或時は又歩道の丁度眞上に、女醫生何とかの招牌がぶら下つてゐる所も通れば、漆喰の剝けた塀か何かに、南洋煙草の廣告びらが貼りつけてある所も通つた。が、いくら歩いて行つても、容易に私の旅館へ來ない。その内に私はアニセツトの祟りか、喉が渴いてたまらなくなつた。

「おい、何か飲む所はないかな。僕は莫迦に喉が渴くんだが。」

「すぐ其處にカツフェが一軒ある。もう少しの辛抱だ。」

五分の後我我兩人は、冷たい曹達を飲みながら、小さな卓子に坐つてゐた。

このカツフェはパリジャンなどより、餘程下等な所らしい。桃色に塗つた壁の側には、髪を分けた支那の少年が、大きなピアノを叩いてゐる。それからカツフェのまん中には、英吉利の水兵が三四人、頬紅の濃い女たちを相手に、だらしない舞踏を續けてゐる。最後に入口の硝子戸の側には、薔薇の花を賣る支那の婆さんが、私に不要を食はされた後、ぼんやり舞踏を眺めてゐる。私は何だか晝入新聞の挿畫でも見るやうな心もちになつた。晝の題は勿論「上海」である。

其處へ外から五六人、同じやうな水兵仲間が、一時にどやどやはひつて來た。この時一番莫迦を見たのは、戸口に立つてゐた婆さんである。婆さんは酔はらひの水兵連が、亂暴に戸を押し開ける途端、腕にかけた籠を落してしまつた。しかも當の水兵連は、そんな事

にかまふ所ぢやない。もう踊つてゐた連中と一しよに、氣違ひのやうにとち狂つてゐる。婆さんはぶつぶつ云ひながら、床に落ちた薔薇を拾ひ出した。が、それさへ拾つてゐる内には、水兵たちの靴に踏みにじられる。……

「行かうか？」
ジョオンズは辟易したやうに、ぬつと大きな體を起した。
「行かう。」

私もすぐに立ち上つた。が、我我の足もとには、點點と薔薇が散亂してゐる。私は戸口へ足を向けながら、ドオミエの畫を思ひ出した。

「おい、人生はね。」

ジョオンズは婆さんの籠の中へ、銀貨を一つ抛りこんでから、私の方へ振返つた。

「人生は、——何だい？」

「人生は薔薇を撒き散らした路であるさ。」

我我はカツフェの外へ出た。其處には不相變黄包車が、何臺か客を待つてゐる。それが我我の姿を見ると、我勝ちに四方から駆けて來た。車屋はもとより不要である。が、この時私は彼等の外にも、もう一人別な厄介者がついて來たのを發見した。我我の側には、何時の間にか、あの花賣りの婆さんが、くどくどと何かしやべりながら、乞食のやうに手を出してゐる。婆さんは銀貨を貰つた上にも、また我我の財布の口を開けさせる心算であるらしい。私はこんな欲張りに賣られる、美しい薔薇が氣の毒になつた。この圖圖しい婆さんと、晝間乗つた馬車の馭者と、——これは何も上海の第一瞥に限つた事ぢやない。残念ながら同時に又、確に支那の第一瞥であつた。

五 病院

私はその翌日から床に就いた。さうしてその又翌日から、里見さんの病院に入院した。病名は何でも乾性の肋膜炎とか云ふ事だつた。假にも肋膜炎になつた以上、折角企てた支

那旅行も、一先づ見合せなければならぬかも知れない。さう思ふと大いに心細かつた。私は早速大阪の社へ、入院したと云ふ電報を打つた。すると社の薄田氏から、「ユツクリレウヨウセヨ」と云ふ返電があつた。しかし一月なり二月なり、病院にはいつたぎりだつたら、社でも困るのには違ひない。私は薄田氏の返電にほつと一先安心しながら、しかも紀行の筆を執るべき私の義務を考へると、愈々心細がらずにはゐられなかつた。

しかし幸ひ上海には、社の村田君や友住君の外にも、ジョオンズや西村貞吉のやうな、學生時代の友人があつた。さうしてこれらの友人知己は、忙しい體にも關らず、始終私を見舞つてくれた。しかも作家とか何とか云ふ、多少の虚名を負つてゐたおかげに、時時未知の御客からも、花だの果物だのを頂戴した。現に一度などはビスケットの罐が、聊か處分にも苦しむ位、すらりと枕頭に並んだりした。(この窮境を救つてくれたのは、やはりわが敬愛する友人知己諸君である。諸君は病人の私から見ると、いづれも不思議な程健啖だつた。) いや、さう云ふ御見舞物を辱くしたばかりぢやない。始は未知の御客だつた中に

も、何時か互に遠慮のない友達づき合ひをする諸君が、二人も三人も出来るやうになつた。俳人四十起君もその一人である。石黒政吉君もその一人である。上海東方通信社の波多博君もその一人である。

それでも七度五分程の熱が、容易にとれないとなつて見ると、不安は依然として不安だつた。どうかすると眞つ晝間でも、ぢつと横になつてはゐられない程、急に死ぬ事が怖くなりなぞした。私にはかう云ふ神経作用に、祟られたくない一心から、晝は満鐵の井川氏やジョオンズが親切に貸してくれた、二十冊あまりの横文字の本を手當り次第讀破した。ラ・モツトの短篇を讀んだのも、テイツチェンズの詩を讀んだのも、ジャイルズの議論を讀んだのも、悉この間の事である。夜は、——これは里見さんには内證だつたが、萬一の不眠を氣づかふ餘り、毎晩缺かさずカルモチンを呑んだ。それでさへ時時は夜明け前に、眼がさめてしまふのには辟易した。確か王次回の疑雨集の中に、「藥餌無徵怪夢頻」とか云ふ句がある。これは詩人が病氣なのぢやない。細君の重病を歎いた詩だが、當時の私を詠じた

としても、この句は文字通り痛切だつた。「藥餌無徴怪夢頻」私は何度床の上に、この句を口にしたかわからない。

その内に春は遠慮なしに、すんすん深くなつて行つた。西村が龍華の桃の話をする。蒙古風が太陽も見えない程、黄塵を空へ運んで来る。誰かがマンガオを御見舞にくれる。もう蘇州や杭州を見るには、持つて来いの氣候になつたらしい。私は隔日に里見さんに、ドイヨヂカルの注射をして貰ひながら、このベッドに寝なくなるのは、何時の事だらうと思ひ思ひした。

附記 入院中の事を書いてゐれば、まだいくらでも書けるかも知れない。が、格別上海なるものに大關係もなさうだから、これだけにして置かうと思ふ。唯書き加へて置きたいの、里見さんが新傾向の俳人だつた事である。次手に近付を一つ擧げると、炭をつぎつつ胎動のあるを語る

六 城内 (上)

上海の城内を一見したのは、俳人四十起氏の案内だつた。

薄暗い雨もよひの午後である。二人を乗せた馬車は一散に、賑かな通りを走つて行つた。朱泥のやうな丸焼きの鶏が、べた一面に下つた店がある。種種雑多の吊洋燈が、無氣味な程並んだ店がある。精巧な銀器が鮮かに光つた、裕福さうな銀樓もあれば、太白の遺風の招牌が古びた、貧乏らしい酒棧もある。——そんな支那の店構へを面白がつて見てゐる内に、馬車は廣い往來へ出ると、急に速力を緩めながら、その向うに見える横町へはいつた。何でも四十起氏の話によると、以前はこの廣い往來に、城壁が聳えてゐたのださうである。

馬車を下りた我我は、すぐに又細い横町へ曲つた。これは横町と云ふよりも、露路と云つた方が適當かも知れない。その狭い路の兩側には、麻雀の道具を賣る店だの、紫檀の道

具を賣る店だのが、ぎつしり軒を並べてゐる。その又せこましい軒先には、無暗に招牌がぶら下つてゐるから、空の色を見るのも困難である。其處へ人通りが非常に多い。うっかり店先に並べ立てた安物の印材でも覗いてゐると、忽ち誰かにつつかつてしまふ。しかもその目まぐるしい通行人は、大抵支那の平民である。私は四十起氏の跡につきながら、滅多に側眼もふらない程、恐る恐る敷石を踏んで行つた。

その露路を向うへつき當ると、噂に聞き及んだ湖心亭が見えた。湖心亭と云へば立派らしいが、實は今にも壊れ兼ねない、荒廢を極めた茶館である。その上亭外の池を見ても、まつ蒼な水どろろが浮んでゐるから、水の色などは殆見えない。池のまはりには石を疊んだ、これも怪しげな欄干がある。我々が丁度其處へ來た時、淺葱木綿の服を着た、薔子の長い支那人が一人、——ちよいとこの間に書き添へるが、菊池寛の説によると、私は度々小説の中に、後架とか何とか云ふやうな、下等な言葉を使ふさうである。さうしてこれは句作なぞするから、自然と蕪村の馬の糞や芭蕉の馬の尿の感化を受けてしまつたのださう

である。私は勿論菊池の説に、耳を傾けない心算ぢやない。しかし支那の紀行となると、場所その物が下等なのだから、時時は禮節も破らなければ、潑刺たる描寫は不可能である。もし諷だと思つたら、試みに誰でも書いて見るが好い。——そこで又元へ立ち戻ると、その一人の支那人は、悠悠と池へ小便をしてゐた。陳樹藩が叛旗を翻さうが、白話詩の流行為が下火にならうが、日英續盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には、問題にならないのに相違ない。少くともこの男の態度や顔には、さうとしか思はれない長閑さがあつた。曇天にそば立つた支那風の亭と、病的な緑色を擴げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆隆たる一條の小便と、——これは憂鬱愛すべき風景畫たるばかりぢやない。同時に又わが老大國の、辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿に、しみじみと少時眺め入つた。が、生憎四十起氏には、これも感慨に價する程、珍しい景色ぢやなかつたと見える。「御覽なさい。この敷石に流れてゐるのも、こいつはみんな小便ですぜ。」四十起氏は苦笑を洩した儘、さつさと池の縁を曲つて行つた。さう云へば成程空氣の中

にも、重苦しい尿臭が漂つてゐる。この尿臭を感じるが早いか、魔術は忽ちに破れてしまつた。湖心亭は畢に湖心亭であり、小便は畢に小便である、私は靴を爪立てながら、匆匆四十起氏の跡を追つた。出たらめな詠歎などに耽るものぢやない。

七 城内 (中)

それから少し先へ行くと、盲目の老乞食が坐つてゐた。——一體乞食と云ふものは、ロマンティックなものである。ロマンティックイズムとは何ぞやとは、議論の干ない問題だが、少くともその一特色は、中世紀とか幽霊とか、アフリカとか夢とか女の理窟とか、何時も不可知な何物かに憧れる所が身上市らしい。して見れば乞食が會社員より、ロマンティックなのは當然である。處が支那の乞食となると、一通りや二通りの不可知ぢやない。雨の降る往來に寝ころんでゐたり、新聞紙の反古しか着てゐなかつたり、石榴のやうに肉の腐つた膝頭をべろべろ舐めてゐたり、——要するに少少恐縮する程、ロマンティックに出来

上つてゐる。支那の小説を讀んで見ると、如何なる道樂か、神仙が乞食に化けてゐる話が多い。あれは支那の乞食から、自然に發達したロマンティックイズムである。日本の乞食では支那のやうに、超自然な不潔さを具へてゐないから、ああ云ふ話は生まれて來ない。まづ精精將軍家の駕籠へ、種ヶ島を打ちかけるとか、山中の茶の湯を御馳走しに、柳里恭を招待するとか、その位の所が關の山である。——あまり横道へ反れすぎたが、この盲目の老乞食も、赤脚仙人か鐵拐仙人が、化けてでもゐさうな恰好だつた。殊に前の敷石を見ると悲惨な彼の一生が、綺麗に白墨で書き立ててある。字も私に比べるとどうやら多少うまいらしい。私はこんな乞食の代書は、誰がするのだらうと考へた。

その先の露路へさしかゝると、今度は骨董屋が澤山あつた。此處はどの店を覗いて見ても、銅の香爐だの、埴輪の馬だの、七寶の鉢だの、龍頭瓶だの、玉の文鎮だの、青貝の戸棚だの、大理石の硯屏だの、剝製の雉だの、恐るべき仇英だのが、雑然とあたりを塞いだ中に、水煙管を啣へた支那服の主人が、氣樂さうに客を待ち受けてゐる。次手にちよいと

ひやかして見たが、五割方は懸値であるとしても、値段は格別安さうぢやない。これは日本へ歸つた後、香取秀眞氏にひやかされた事だが、骨董を買ふには支那へ行くより、東京日本橋仲通りを徘徊した方が好ささうである。

骨董屋の間を通り抜けたら、大きな廟のある所へ出た。これが晝端書でも御馴染の、名高い城内の城隍廟である。廟の中には參詣人が、入れ交り立ち交り叩頭に来る。勿論線香を獻じたり、紙錢を焚いたりするものも、想像以上に大勢ある。その煙に燻ぶるせるか、梁間の額や柱上の聯は悉妙に油ぎつてゐる。事によると煤けてゐないものは、天井から幾つも吊り下げた、金銀二色の紙錢だの、螺旋状の線香だのばかりかも知れない。これだけでも既に私には、さつきの乞食と同じやうに、昔讀んだ支那の小説を想起させるのに十分である。まして左右に居流れた、判官らしい像になると、——或は正面に端坐した城隍らしい像になると、殆聊齋志異だとか、新齋諧だとかと云ふ書物の挿畫を見るのと變りはない。私は大いに敬服しながら、四十起氏の迷惑などはそつち除けに、何時までも其處を

離れなかつた。

八 城内 (下)

今更云ふまでもない事だが、鬼狐の談に富んだ支那の小説では、城隍を始め下廻りの判官や鬼隸も暇ぢやない。城隍が廡下に一夜を明かした書生の運勢を開いてやると、判官は町中を荒し廻つた泥坊を驚死させてしまふ。——と云ふと好い事ばかりのやうだが、狗の肉さへ供物にすれば、悪人の味方もすると云ふ、賊城隍がある位だから、人間の女房を追ひ廻した報いに、肘を折られたり頭を落されたり、天下に赤恥を廣告する判官や鬼隸も少くない。それが本だけ讀んだのでは、何だか得心の出来ない所がある。つまり筋だけは呑みこめても、その割に感じがびつたり來ない。其處が齒痒い氣がしたものだ。今の城隍廟を目のあたりに見ると、如何に支那の小説が、荒唐無稽に出來上つてゐても、その想像の生れた因縁は、一一成程と頷かれる。いやあんな赤つ面の判官では、悪少の眞

似位はするかも知れない。あんな美髯の城隍なら、堂堂たる儀衛に團まれた儘、夜空に昇るのも似合ひさうである。

こんな事を考へた後、私は又四十起氏と一しよに、廟の前へ店を出した、いろいろな露店を見物した。靴足袋、玩具、甘蔗の莖、貝釦、手巾、南京豆、——その外まだ薄穢い食物店が澤山ある。勿論此處の人の出は、日本の縁日と變りはない。向うには派手な鞆の背廣に、紫水晶のネクタイ・ピンをした、支那人のハイカラが歩いてゐる。と思ふと又こちらには、手首に銀の環を嵌めた、纏足の靴が二三寸しかない、舊式なお上さんも歩いてゐる。金瓶梅の陳敬濟、品花寶鑑の谿十一、——これだけ人の多い中には、さう云ふ豪傑もゐさうである。しかし杜甫とか、岳飛とか、王陽明とか、諸葛亮とかは、藥にしたくもゐさうぢやない。言ひ換へれば現代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、残酷な、食意地の張つた、小説にあるやうな支那である。瀬戸物の亭だの、睡蓮だの、刺繍の鳥だのを有難がつた、安物のモック・オリエンタリズムは、西洋でも追

ひ追ひ流行らなくなつた。文章軌範や唐詩選の外に、支那あるを知らない漢學趣味は、日本でも好い加減に消滅するが好い。

それから我我は引き返して、さつきの池の側にある、大きな茶館を通り抜けた。伽藍のやうな茶館の中には、思ひの外客が立て込んでゐない。が、其處へはいるや否や、雲雀、目白、文鳥、鸚哥、——ありとあらゆる小鳥の聲が、目に見えない驟雨か何かのやうに、一度に私の耳を襲つた。見れば薄暗い天井の梁には、一面に鳥籠がぶら下つてゐる。支那人が小鳥を愛する事は、今になつて知つた次第ぢやない。が、こんなに鳥籠を並べて、こんな鳥の聲を聞はせようとは、夢にも考へなかつた事實である。これでは鳥の聲を愛する所か、まづ鼓膜が破れないやうに、匆匆兩耳を塞がざるを得ない。私は殆ど逃げるやうに四十起氏を促し立てながら、この金切聲に充滿した、恐るべき茶館を飛び出した。

しかし小鳥の啼き聲は、茶館の中ばかりある訣ぢやない。やつとその外へ脱出して、狭い往來の右左に、ずらりと懸け並べた鳥籠からは、しつきりない囀りが降りかかつて來

る。尤もこれは閑人どもが、道樂に啼かせてゐるのぢやない。いづれも専門の小鳥屋が、(實を云ふと小鳥屋だか、それとも又鳥籠屋だか、どちらだか未だに判然しない。)店を連ねてゐるのである。

「少し待つて下さい。鳥を一つ買つて來ますから。」

四十起氏は私にさう云つてから、その店の一つにはいつて行つた。其處をちよいと通りすぎた所に、ペンキ塗りの寫眞屋が一軒ある。私は四十起氏を待つ間、その飾り窓の正面にある、梅蘭芳の寫眞を眺めてゐた。四十起氏の歸りを待つてゐる子供たちの事などを考へながら。

九 戲臺 (上)

上海では僅に二三度しか、芝居を見物する機会がなかつた。私が速成の劇通になつたのは、北京へ行つた後の事である。しかし上海で見た役者の中にも、武生では名高い蓋叫天

とか、花旦では綠牡丹とか小翠花とか、兎に角當代の名伶があつた。が、役者を談する前に、芝居小屋の光景を紹介しないと、支那の芝居とはどんなものだか、はつきり讀者には通じないかも知れない。

私の行つた劇場の一つは、天蟾舞臺と號するものだつた。此處は白い漆喰塗りの、まだ眞新らしい三階建である。その又二階だの三階だのが、ぐるりと眞鍮の欄干をつけた、半圓形になつてゐるのは、勿論當世流行の西洋の眞似に違ひない。天井には大きな電燈が、煌煌と三つぶら下つてゐる。客席には煉瓦の床の上に、すつと籐椅子が並べてある。が、苟も支那たる以上、籐椅子と雖も油斷は出來ない。何時か私は村田君と、この籐椅子に坐つてゐたら、兼ね兼ね恐れてゐた南京蟲に、手頸を二三箇所やられた事がある。しかしまづ芝居の中は、大體不快を感じない程度に、綺麗だと云つて差支ない。

舞臺の兩側には大きな時計が一つづつちやんと懸けてある。(尤も一つは止まつてゐた。)その下には煙草の廣告が、あくどい色彩を並べてゐる。舞臺の上の欄間には、漆喰の薔薇

ヤアツカンサスの中に、天聲人語と云ふ大文字がある。舞臺は有樂座より廣いかも知れない。此處にももう西洋式に、フット・ライトの装置がある。幕は、——さあ、その幕だが、一場一場區別する爲には、全然幕を使用しない。が、背景を換へる爲には、——と云ふよりも背景それ自身としては、蘇州銀行と三砲臺香烟即ちスリイ・キヤツスルズの下等な廣告幕を引く事がある。幕は何處でもまん中から、兩方へ引く事になつてゐるらしい。その幕を引かない時には、背景が後を塞いでゐる。背景はまづ油繪風に、室内や室外の景色を描いた、新舊いろいろの幕である。それも種類は二三種しかないから、姜維が馬を走らせるのも、武松が人殺しを演ずるのも、背景には一向變化がない。その舞臺の左の端に、胡弓、月琴、銅鑼などを持った、支那の御囃しが控へてゐる。この連中の中には一人二人、鳥打帽をかぶつた先生も見える。

序に芝居を見る順序を云へば、一等だらうが二等だらうが、すんすん何處へでもはいつてしまへば好い。支那では席を取つた後、場代を拂ふのが慣例だから、その邊は甚輕便

である。さて席が定まると、熱湯を通したタオルが来る、活版刷りの番附が来る。茶は勿論大土瓶が来る。その外西瓜の種だとか、一文菓子だとか云ふ物は、不要不要をきめてしまへば好い。タオルも一度隣にゐた、風貌堂堂たる支那人が、さんざん顔を拭いた擧句鼻をかんだのを目撃して以來、當分不要をきめた事がある。勘定は出方の祝儀とも、一等では大抵二圓から一圓五十錢の間かと思ふ。かと思ふと云ふ理由は、何時でも私に拂はせず、村田君が拂つてしまつたからである。

支那の芝居の特色は、まづ鳴物の騷騒しさが想像以上な所にある。殊に武劇——立ち廻りの多い芝居になると、何しろ何人かの大の男が、眞劍勝負でもしてゐるやうに舞臺の一角を睨んだなり、必死に銅鑼を叩き立てるのだから、到底天聲人語所ぢやない。實際私も慣れない内は、兩手に耳を押へない限り、とても坐つてはゐられなかつた。が、わが村田烏江君などになると、この鳴物が穩かな時は物足りない氣持がするさうである。のみならず芝居の外にゐても、この鳴物の音さへ聞けば、何の芝居をやつてゐるか、大抵見當がつくさ

うである。「あの騒騒しい所がよかもんなあ。」——私は君がさう云ふ度に、一體君は正氣か
どうか、それさへ怪しいやうな心もちがした。

十 戲臺 (下)

その代り支那の芝居にれば、客席では話をしてゐようが、子供がわあわあ泣いてゐよ
うが、格別苦にも何にもならない。これだけは至極便利である。或は支那の事だから、た
とひ見物が静かでもなくとも、聴戲には差支へが起らないやうに、こんな鳴物が出来たのか
も知れない。現に私などは一幕中、筋だの役者の名だの歌の意味だの、いろいろ村田君に
教はつてゐたが、向う三軒兩隣の君子は、一度もうるささうな顔をしなかつた。

支那の芝居の第二の特色は、極端に道具を使はない事である。背景の如きも此處にはあ
るが、これは近頃の發明に過ぎない。支那本來の舞臺の道具は、椅子と机と幕とだけであ
る。山嶽、海洋、宮殿、道塗——如何なる光景を現すのでも、結局これらを配置すは外

一本の立木も使つたことはない。役者がさも重さうに、門を外すらしい眞似をしたら、見
物はいやでもその空間に、扉の存在を認めなければならぬ。又役者が意氣揚揚と、房のつ
いた鞭を振りまはしてゐたら、その役者の股ぐらの下には、騙つて行かざる紫駱か何かが
嘶いてゐるなと思ふべきである。しかしこれは日本人だと、能と云ふ物を知つてゐるから
すぐにそのこつを呑みこんでしまふ。椅子や机を積上げたのも、山だと思へと云はれれば
咄嗟によろしいと引き受けられる。役者がちよいと片足上げたなら、其處に内外を分つべき
鬨があるのだと云はれても、これ亦想像に難くはない。のみならずその寫實主義から、一
歩を隔てた約束の世界に、意外な美しささへ見る事がある。さう云へば今でも忘れないが、
小翠花が梅龍鎮を演じた時、旗亭の娘に扮した彼はこの鬨を越える度に、必ず艷色の補子
の下から、ちらりと小さな靴の底を見せた。あの小さな靴の底の如きは、架空の鬨でなか
つたとしたら、あんなに可憐な心もちは起させなかつたのに相違ない。

この道具を使はない所は、上に述べたやうな次第だから、一向我我には苦にならない。

寧ろ私が辟易したのは、盆とか皿とか手燭とか、普通に使はれる小道具類が如何にも出た
 らめなことである。たとへば今の梅龍鎮にしても、つらつら戯考を按ずると、當世に起つ
 た出来事ぢやない。明の武宗が微行の途次、梅龍鎮の旗亭の娘、鳳姐を見染めると云ふ筋
 である。處がその娘の持つてゐる盆は、薔薇の花を描いた陶器の底に、銀鍍金の縁などが
 ついてゐる。あれは何處かのデイパアメント・ストアに、並んでゐたものに違ひない。
 もし梅若萬三郎が、大口にサアベルをぶら下げて出たら、——そんな事の莫迦莫迦しいの
 は、多言を要せずとも明かである。

支那の芝居の第三の特色は、隈取りの變化が多い事である。何でも辻聴花翁によると、
 曹操一人の隈取りが、六十何種もあるさうだから、到底市川流所の騒ぎぢやない。その又
 隈取りも甚しいのは、赤だの藍だの代赭だのが、一面に皮膚を蔽つてゐる。まづ最初の感
 じから云ふと、どうしても化粧とは思はれない。私などは武松の芝居へ、蔣門神がその
 そ出て來た時には、いくら村田君の説明を聴いても、やはり假面だと思はれなかつた。

一見あの所謂花臉も、假面ではない事が看破出來れば、その人は確に幾分か千里眼に近い
 のに相違ない。

支那の芝居の第四の特色は、立廻りが猛烈を極める事である。殊に下廻りの活動になる
 と、これを役者と稱するのは、輕業師と稱するの當れるに若かない。彼等は舞臺の端から
 端へ、續けさまに二度宙返りを打つたり、正面に積上げた机の上から、眞つ倒に跳ね下
 りたりする。それが大抵は赤いズボンに、半身は裸の役者だから、愈曲馬か玉乗りの親
 類らしい氣がしてしまふ。勿論上等な武劇の役者も、言葉通り風を生ずる程、青龍刀や何
 かを振り廻して見せる。武劇の役者は昔から、腕力が強いと云ふ事だが、これでは腕力が
 なかつた日には、肝腎の商賣が勤まりつこはない。しかし武劇の名人となると、やはりか
 ら云ふ離れ業以外に、何處か獨得な氣品がある。その證據には蓋叫天が、宛然日本の車屋
 のやうな、パツチばきの武松に扮するのを見ても、無暗に刀を揮ふ時より、何かの拍子に
 無言の儘、じろりと相手を見る時の方が、どの位行者武松らしい、凄味に富んでゐるか

わからない。

勿論かう云ふ特色は、支那の舊劇の特色である。新劇では隈取りもしなければ、とんぼ返りもやらないらしい。では何處までも新しいかと云ふと、亦舞臺とかに上演してゐた、賣身投靠と云ふのなぞは、火のない蠟燭を持つて出てもやはり見物はその蠟燭が、ともつてゐる事と想像する。——つまり舊劇の象徴主義は依然として舞臺に残つてゐた。新劇は上海以外でも、その後二三度見物したが、此點ではどれも遺憾ながら、五十歩百歩だつたと云ふ外はない。少くとも雨とか稲妻とか夜になつたとか云ふ事は、全然見物の想像に依頼するものばかりだつた。

最後に役者の事を述べると、——蓋叫天だの小翠花だのは、もう引き合ひに出して置いたから、今更別に述べる事はない。が、唯一つ書いて置きたいのは、樂屋にゐる時の綠牡丹である。私が彼を訪問したのは、亦舞臺の樂屋だつた。いや、樂屋と云ふよりも、舞臺裏と云つた方が、或は實際に近いかも知れない。兎に角其處は舞臺の後の、壁が剝けた、

蒜臭い、如何にも慘澹たる處だつた。何でも村田君の話によると、梅蘭芳が日本へ来た時、最も彼を驚かしたものは、樂屋の綺麗な事だつたと云ふが、かう云ふ樂屋に比べると成程帝劇の樂屋なぞは、驚くべく綺麗なのに相違ない。おまけに支那の舞臺裏には、なり薄きたない役者たちが、顔だけは例の隈取りをした儘、何人もうろろ歩いてゐる。それが電燈の光の中に、恐るべき埃を浴びながら、往つたり來たりしてゐる容子は、殆ど百鬼夜行の圖だつた。さう云ふ連中の通り路から、ちよいと陰になつた所に、支那靴や何かを抛り出してゐる。綠牡丹はその支那靴の一つに、驚だけは脱いでゐたが、妓女蘇三に扮した儘、丁度茶を飲んで居る所だつた。舞臺では細面に見えた顔も、今見れば存外華奢ではない。寧ろセンシユアルな感じの強い、立派に發育した青年である。背も私に比べると、確に五分は高いらしい。その夜も一しよだつた村田君は、私を彼に紹介しながら、この利巧さうな女形と、互に久瀾を叙し合つたりした。聞けば君は綠牡丹が、まだ無名の子役だつた頃から、彼でなければ夜も日も明けない、熱心な最良の一人なのださうである。私は

彼に、玉堂春は面白かつたと云ふ意味を傳へた。すると彼は意外にも、「アリガト」と云ふ日本語を使つた。さうして——さうして彼が何をしたか。私は彼れ自身の爲にも又わが村田烏江君の爲にも、こんな事は公然書きたくない。が、これを書かなければ、折角彼を紹介した所が、むざむざ眞を逸してしまふ。それでは讀者に對しても、甚濟まない次第である。その爲に敢然正筆を使ふと、——彼は横を向くが早い、眞紅に銀絲の繡をした、美しい袖を翻して、見事に床の上へ手渡をかんだ。

十一 章炳麟氏

章炳麟氏の書齋には、如何なる趣味か知らないが、大きな鰐の剝製が一匹、腹這ひに壁に引つ付いてゐる。が、この書物に埋まつた書齋は、その鰐が皮肉に感じられる程、言葉通り肌沁みるやうに寒い。尤も當日の天候は、發句の季節を借用すると、正に冴え返る雨天だつた。其處へ瓦を張つた部屋には、敷物もなければ、ストオヴもない。坐るのは勿

論清團のない、角張つた紫檀の肘掛椅子である。おまけに私の着てゐたのは、薄いセルの間着だつた。私は今でもあの書齋に、坐つてゐた事を考へると、幸にも風を引かなかつたのは、全然奇蹟としか思はれない。

しかし章太炎先生は、鼠色の太掛兒に、厚い毛皮の裏のついた、黒い馬掛兒を一着してゐる。だから無論寒くはない。その上氏の坐つてゐるのは、毛皮を掛けた籐椅子である。私は氏の雄辯に、煙草を吸ふ事も忘れながら、しかも氏が暖さうに、悠然と足を伸ばしてゐるのには、大いに健康に堪へなかつた。

風説によれば章炳麟氏は、自ら王者の師を以て任じてゐると云ふ事である。さうして一時はその御弟子に、黎元洪を選んだと云ふ事である。さう云へば机の横手の壁には、あの鰐の剝製の下に、「東南撲學、章太炎先生、元洪」と書いた、横卷の軸が懸つてゐる。しかし遠慮のない所を云ふと、氏の顔は決して立派ぢやない。皮膚の色は殆黄色である。口髭や鬚は氣の毒な程薄い。突兀と聳えた額なども、瘤ではないかと思ふ位である。が、そ

の絲のやうに細い眼だけは、——上品な縁無し眼鏡の後に、何時も冷然と何時も微笑した眼だけに、確に出来合ひの代物ぢやない。この眼の爲に袁世凱は、先生を囹圄に苦しませたのである。同時に又この眼の爲に、一旦は先生を監禁しても、とうとう殺害は出来なかつたのである。

氏の話題は徹頭徹尾、現代の支那を中心とした政治や社會の問題だつた。勿論不要とか「等一等」とか、車屋相手の熟語以外は、一言も支那語を知らない私に議論なぞのわかる理由はない。それが氏の論旨を知つたり、時時は氏に生意氣な質問なども發したりしたのは、悉週報「上海」の主筆西本省三氏のおかげである。西本氏は私の隣りの椅子に、ちやんと胸を反らせた儘、どんな面倒な議論になつても、深切に通譯を勤めてくれた。(殊に當時は週報「上海」の締切り日が迫つてゐたのだから、私は愈々氏の御苦勞に感謝せざるを得ないのである。)

「現代の支那は遺憾ながら、政治的には墮落してゐる。不正が公行してゐる事も、或は清

朝の末年よりも、一層夥しいと云へるかも知れない。學問藝術の方面になれば、猶更沈滞は甚しいやうである。しかし支那の國民は、元來極端に趨る事をしない。この特性が存する限り、支那の赤化は不可能である。成程一部の學生は、勞農主義を歡迎した。が、學生は即ち國民ではない。彼等さへ一度は赤化しても必ず何時かはその主張を抛つ時が来るであらう。何故と云へば國民性は、——中庸を愛する國民性は、一時の感激よりも強いからである。」

章炳麟氏はしつきりなしに、爪の長い手を振りながら、滔滔と獨得な説を述べた。私は唯寒かつた。

「では支那を復興するには、どう云ふ手段に出るが好いか？ この問題の解決は、具體的にはどうするにもせよ、机上の學説からは生まれる筈がない。古人も時務を知るものは俊傑なりと道破した。一つの主張から演繹せずに、無數の事實から歸納する、——それが時務を知るのである。時務を知つた後に、計畫を定める、——時に循つて、宜しきを制すと

は、結局この意味に外ならない。……」
私は耳を傾けながら、時時壁上の鰐を眺めた。さうして支那問題とは没交渉に、こんな事をふと考へたりした。——あの鰐はきつと睡蓮の匂と太陽の光と暖な水とを承知してゐるのに相違ない。して見れば現在の私の寒さは、あの鰐に一番通じる筈である。鰐よ、剝製のお前は仕合せだつた。どうか私を憐んでくれ。まだこの通り生きてゐる私を。……

十二 西洋

問。上海は單なる支那ぢやない。同時に又一面では西洋なのだから、その邊も十分見て行つてくれ給へ。公園だけでも日本よりは、餘程進歩してゐると思ふが、——

答。公園も一通りは見物したよ。佛蘭西公園やジエスフィールド公園は、散歩するに、持つて來いだ。殊に佛蘭西公園では、若葉を出した篠懸の間に、西洋人のお袋だの乳母だのが子供を遊ばせてゐる、それが大變綺麗だつたつけ。——だが格別日本よりも、進歩して

ゐるとは思はないね。唯此處の公園は、西洋式だと云ふだけぢやないか？ 何も西洋式になりさへすれば、進歩したと云ふ訣でもあるまいし。

問。新公園にも行つたかい？

答。行つたとも。しかしあれは運動場だらう。僕は公園だとは思はなかつた。

問。パブリック・ガーデンは？

答。あの公園は面白かつた。外國人はいつても好いが、支那人は一人もはひる事が出來ない。しかもパブリックと號するのだから、命名の妙を極めてゐるよ。

問。しかし往來を歩いてゐても、西洋人の多い所などは、何だか感じが好いちやないか？

此も日本ぢや見られない事だが、——

答。さう云へば僕はこの間、鼻のない異人を見かけたつけ。あんな異人に遇ふ事は、ちよいと日本ぢやむづかしいかも知れない。

問。あれか？ あれは流感の時、まつさきにマスクをかけた男だ。——しかし往來を歩

いてゐても、やはり異人に比べると、日本人は皆貧弱だね。

答。洋服を着た日本人はね。

問。和服を着たのは猶困るぢやないか？ 何しろ日本人と云ふやつは、肌が人に見える事は、何とも思つてゐないんだから、――

答。もし何とか思ふとすれば、それは思ふものが猥褻なのさ。久米の仙人と云ふ人は、その爲に雲から落ちたぢやないか？

問。ぢや西洋人は猥褻かい？

答。勿論その點では猥褻だね。唯風俗と云ふやつは、残念ながら多數決のものだ。だから今に日本人も、素足で外へ出かけるのは、卑しい事のやうに思ふだらう。つまりだんだん以前よりも、猥褻になつて行くのだね、

問。しかし日本の藝者などが、白晝往來を歩いてゐるのは、西洋人の手前も恥入るからね。

答。何、そんな事は安心し給へ。西洋人の藝者も歩いてゐるのだから、――唯君には見分けられないのさ。

問。これはちと手厳しいな。佛蘭西租界なぞへも行つたかい？

答。あの住宅地は愉快だつた。柳がもう煙つてゐたり、鳩がかすかに啼いてゐたり、桃がまだ咲いてゐたり、支那の民家が残つてゐたり、――

問。あの邊は殆ど西洋だね。赤瓦だの、白煉瓦だの、西洋人の家も好いぢやないか？

答。西洋人の家は大抵駄目だね。少くとも僕の見た家は悉く下等なものばかりだつた。

問。君がそんな西洋嫌ひとは、夢にも僕は思はなかつたが、――

答。僕は西洋が嫌ひなのぢやない。俗悪なものが嫌ひなのだ。

問。それは僕も勿論さうさ。

答。諷をつき給へ。君は和服を着るよりも、洋服を着たいと思つてゐる。門構への家に住むよりも、バンガロオに住みたいと思つてゐる。釜揚げうどんを食ふよりも、マカロニを

食ひたいと思つてゐる。山本山を飲むよりも、ブラジル珈琲を飲み——
問。もうわかつたよ。しかし墓地は悪くはあるまい、あの静安寺路の西洋人の墓地は？
答。墓地とは亦窮したね。成程あの墓地は氣が利いてゐた。しかし僕はどちらかと云へば、大理石の十字架の下より、土饅頭の下に横になつてゐたい。況や怪しげな天使などの彫刻の下は眞平御免だ。

問。すると君は上海の西洋には、全然興味を感じないのかい？

答。いや、大いに感じてゐるのだ。上海は君の云ふ通り、兎に角一面では西洋だからね。

善かれ悪かれ西洋を見るのは、面白い事に違ひないぢやないか？ 唯此處の西洋は本場を見ない僕の眼にも、やはり場違ひのやうな氣がするのだ。

十三 鄭孝胥氏

坊間に傳ふる所によれば、鄭孝胥氏は悠悠と、清貧に處してゐるさうである。處が或疊

天の午前、村田君や波多君と一しよに、門前へ自動車を乗りつけて見ると、その清貧に處してゐる家は、私の豫想よりもすつと立派な、鼠色に塗つた三階建だつた。門の内には庭續きらしい、やや黄ばんだ竹むらの前に、雪毬の花などが匂つてゐる。私もかう云ふ清貧ならば、何時身を處しても差支へない。

五分の後我我三人は、應接室に通されてゐた。此處は壁に懸けた軸の外に殆何も裝飾はない。が、マントル・ピースの上には、左右一對の焼き物の花瓶に、小さな黄龍旗が尾を垂れてゐる。鄭蘇戡先生は中華民國の政治家ぢやない、大清帝國の遺臣である。私はこの旗を眺めながら、誰かが氏を批評した「他人之退而不隱者殆不可同日論」とか云ふ、うろ覚えの一句を思ひ出した。

其處へ小肥りの青年が一人、足音もさせずにはいつて來た。これが日本に留學してゐた、氏の令息鄭垂氏である。氏と懇意な波多君は、すぐに私を紹介した。鄭垂氏は日本語に堪能だから、氏と話をする場合、波多村田兩先生の通譯を煩はす必要はない。

鄭孝胥氏が我が我の前に、背の高い姿を現はしたのは、それから間もなくの事だつた。氏は一見した所、老人に似合はず血色が好い。眼も殆ど青年のやうに、朗な光を帯びてゐる。殊に胸を反らせた態度や、盛な手眞似を交へる工合は、鄭垂氏よりも反つて若若しい。それが黒い馬掛兒に、心もち藍の調子が勝つた、薄鼠の太掛兒を着てゐる所は、さすがは當年の才人だけに、如何にも氣が利いた風采である。いや、閑日月に富んだ今さへ、かう潑刺としてゐるやうぢや、康有爲氏を中心とした、芝居のやうな戊戌の變に、花花しい役割を演じた頃には、どの位才氣煥發だつたか、想像する事も難くはない。

氏を加へた我我は、少時支那問題を談じ合つた。勿論私も臆面なしに、新借款團の成立以後、日本に對する支那の輿論とか何とか、柄にもない事を辯じ立てた。——と云ふと甚不眞面目らしいが、その時は何も出たらぬに、そんな事を饒舌つてゐたのではない。私自身では大眞面目に、自説を披露してゐたのである。が、今になつて考へて見ると、どうもその當時の私は、多少正氣ではなかつたらしい。尤もこの逆上の原因は、私の輕薄な

根性の外にも、確に現代の支那その物が、一半の責を負ふべきものである。もし誰だと思つたら、誰でも支那へ行つて見るが好い。必一月とゐる内には、妙に政治を論じたい氣がして来る。あれは現代の支那の空氣が、二十年來の政治問題を孕んでゐるからに相違ない。私の如きは御丁寧にも、江南一帯を経ぐる間、容易にこの熱がさめなかつた。さうして誰も頼まないのに、藝術などよりは數段下等な政治の事ばかり考へてゐた。

鄭孝胥氏は政治的には、現代の支那に絶望してゐた。支那は共和に執する限り、永久に混亂は免れ得ない。が、王政を行ふとしても、當面の難局を切り抜けるには、英雄の出現を待つばかりである。その英雄も現代では、同時に又利害の錯綜した國際關係に處さなければならぬ。して見れば英雄の出現を待つのは、奇蹟の出現を待つものである。

そんな話をしてゐる内に、私が巻煙草を啣へると、氏はすぐに立上つて、隣寸の火をそれへ移してくれた。私は大いに恐縮しながら、どうも客を遇する事は、隣國の君子に比べると、日本人が一番拙らしいと思つた。

紅茶の御馳走になつた後、我我は氏に案内されて、家の後にある廣庭へ出て見た。庭は綺麗な芝原のまはりに、氏が日本から取り寄せた櫻や、幹の白い松が植わつてゐる。その向うにもう一つ、同じやうな鼠色の三階建があると思つたら、それは近頃建てたとか云ふ、鄭垂氏一家の住居だつた。私はこの庭を歩きながら、一むらの竹の秋の上に、やつと雲切れのした青空を眺めた。さうしてもう一度、これならば私も清貧に處したいと思つた。

此原稿を書いて居る時、丁度表具屋から私の所へ、一本の軸が届いて來た。軸は二度目に訪問した時、氏が私に書いてくれた七言絶句を仕立てたのである。「夢奠何如史事強。吳興題識遜元章。延平劍合誇神異。合浦珠還好祕藏」——さう云ふ字が飛舞するやうに墨痕を走らせてゐるのを見ると、氏と相對してゐた何分かは、やはり未だ懐しい氣がする。私はその何分かの間、獨り前朝の遺臣たる名士と相對してゐたのみではない。又實に支那近代の詩宗、海藏樓詩集の著者の警咳に接してゐたのである。

十四 罪惡

拜啓。上海は支那第一の「惡の都會」だとか云ふ事です。何しろ各國の人間が、寄り集まつてゐる所ですから、自然さうもなり易いのでせう。私が見聞しただけでも、風儀は確に悪いやうです。たとへば支那の人力車夫が、追剝ぎに早變りをする事などは、始終新聞に載つてゐます。又人の話によれば、人力車を走らせてゐる間に、後から帽子を盗まれる事も、此處では家常茶飯事ださうです。その最もひどいになると、女の耳環を盗む爲に耳を切るのさへあると云ひます。これは或は泥坊と云ふより、Psychopathia sexualisの一種が手傳ふのかも知れません。さう云ふ罪惡では數月前から、蓮英殺しと云ふ事件が、芝居にも小説にも仕組まれてゐます。これは此處では折白黨と云ふ、つまり無頼の少年團の一人が、金剛石の指環を奪ふ爲に、蓮英と云ふ藝者を殺したのです。その又殺し方が、自動車へ乗せて、徐家匯近傍へ連れ出した擧句、絞殺したと云ふのですから、支那では

兎に角前例のない、新機軸を出した犯罪なのでせう。何でも世間の評判では、日本でも度
 度耳にする通り、探偵物などの活動寫真が、悪影響を興へたのだと云ふ事でした。尤も蓮
 英と云ふ藝者は、私の見た寫真によると、義理にも美人とは評されません。
 勿論賣姪も盛です。青蓮閣などと云ふ茶館へ行けば、彼是薄暮に近い頃から、無数の賣
 笑婦が集まつてゐます。これを野雉と號しますが、さつとどれも見た所は、二十歳以上と
 は思はれません。それが日本人などの姿を見ると、「アナタ、アナタ」と云ひながら、一度
 に周圍へ集まつて來ます。「アナタ」の外にもかう云ふ連中は、「サイゴ、サイゴ」と云ふ事
 を云ひます。「サイゴ」とは何の意味かと思ふと、これは日本の軍人たちが、日露戦争に出
 征中、支那の女をつかまへては、近所の高梁の畑か何かへ、「さあ行かう」と云つたのが、
 濫傷だらうと云ふ事です。語原を聞けば落語のやうですが、何にせよ我我日本人には、餘
 り名譽のある話ではなささうです。それから夜は四馬路あたりに、人力車へ乗つた野雉た
 ちが、必何人もうろついてゐます。この連中は客があると、その客は自分の車に乗せ、自

分は歩いて彼等の家へつれこむと云ふのが習慣ださうです。彼等はどう云ふ料簡か、大抵
 眼鏡をかけてゐます。事によると今の支那では、女が眼鏡をかける事は、新流行の一つか
 も知れません。
 鴉片も半ばは公然と、何處でも吸つてゐるやうです。私の見に行つた鴉片窟などは、
 がすかな豆ラムプを中にしながら、賣笑婦も一人、客と一しよに、柄の長い煙管を啣へてゐ
 ました。その外人の話では、磨鏡黨とか男堂子とか云ふ、大へんな物もあるやうです。男
 堂子とは女の爲に、男が媚を賣るのであり、磨鏡黨とは客の爲に、女が姪戲を見せるのだ
 さうです。そんな事を聞かされると、往來を通る支那人の中にも、辮髪を下げた Marquis
 de Sade などは何人もゐるやうな氣がして來ます。又實際ゐるのでせう。或丁抹人が話した
 のでは、四川や廣東には六年ゐても、屍姦の噂は聞かなかつたのが、上海では近近三週間
 の内に、二つも實例が見當つたさうです。
 その上この頃ではシベリア邊から、男女とも怪しい西洋人が、大勢此處へ來てゐるやう

です。私も一度友だちと一しよに、パブリック・ガーデンを歩いてゐた時、身なりの悪い露西亞人に、しつこく金をねだられました。あれなどは唯の乞食でせうが、餘り氣味の好いものぢやありません。尤も工部局がやかましい爲、上海もまづ大體としては、おひおひ風紀が改まるやうです。現に西洋人の方面でも、エル・ドラドとかパレルモとか云ふ、如何はしいカツフェはなくなりました。しかしずつと郊外に近い、デル・モンテと云ふ所には、まだ商賣人が大勢來ます。

“Green satin, and a dance, white wine and gleaming laughter, with two nodding ear-rings — these are Lotus.”

これはユニイス・テイツチエンズが、上海の妓ロオタスを歌つた詩の一節です。「白葡萄酒と輝かしい笑ひと」——それは一口オタスばかりぢやない、デル・モンテの卓に倚りながら、印度人を交へたオオケストラの音に、耳を貸してゐる女たちは、畢竟この外に出ないのです。以上。

十五 南國の美人 (上)

上海では美人を大勢見た。見たのは如何なる因縁か、何時も小有天と云ふ酒樓だつた。此處は近年物故した清道人李瑞清が、眞眞にしてゐた家ださうである。「道道非常道、天天小有天」——さう云ふ洒落さへあると云ふ事だから、その眞眞も一方ならず、御念が入つてゐるのに違ひない。尤もこの有名な文人は、一度に蟹を七十匹、ぺろりと平けてしまふ位、非凡な胃袋を持つてゐたさうである。

一體上海の料理屋は、餘り居心の好いものぢやない。部屋毎の境は小有天でも無風流を極めた板壁である。その上卓子に並ぶ器物は、綺麗事が看板の一品香でも、日本の洋食屋と選ぶ所はない。その外雅叙園でも、杏花樓でも、乃至興華川茶館でも、味覺以外の感覺は、まあ満足させられるよりも、シヨックを受けるやうな所ばかりである。殊に一度波多君が、雅叙園を御馳走してくれた時には、給仕に便所は何處だと訊いたら、料理場の流し

へしろと云ふ。實際又其處には私よりも先に、油じみた庖丁が一人、ちやんと先例を示してゐる。あれには少からず辟易した。

その代り料理は日本よりも旨い。聊か通らしい顔をすれば、私の行つた上海の御茶屋は、たとへば瑞記とか厚德福とか云ふ、北京の御茶屋より劣つてゐる。が、それにも關らず、東京の支那料理に比べれば、小有天な中でも確に旨い。しかも値段の安い事は、ざつと日本の五分の一である。

大分話が横道に外れたが、私が大勢美人を見たのは、神州日報の社長余洵氏と、食事を共にした時に勝るものはない。此も前に云つた通り、小有天の樓上にゐた時である。小有天は何しろ上海でも、夜は殊に賑かな三馬路の往來に面してゐるから、欄干の外の車馬の響は、殆一分も止む事はない。樓上では勿論談笑の聲や、唄に合せる胡弓の音が、しつきりなしに湧き返つてゐる。私はさう云ふ騒ぎの中に、玫瑰の茶を啜りながら、余君毅氏が局票の上へ健筆を振ふのを眺めた時は、何だか御茶屋に來てゐると云ふより、郵便局の腰

掛の上にも、待たされてゐるやうな忙しさを感じた。

局票は洋紙にうねうねと、「叫、連至三馬路大舞臺東首小有天閣菜館、座侍酒勿延」と赤刷の文字をうねらせてゐる。確か雅叙園の局票には、隅に母志國恥と、排日の氣焰を擧げてゐるが、此處のには幸ひそんな句は見えない。(局票とは大阪の逢ひ状のやうに、校書を呼びにやる用箋である。)余氏はその一枚の上に、私の姓を書いてから、梅逢春と云ふ三字を加へた。

「これがあの林黛玉です。もう行年五十八ですがね。最近二十年間の政局の秘密を知つてゐるのは、大總統の徐世昌を除けば、この人一人だとか云ふ事です。あなたが呼ぶ事にして置きますから、参考の爲に御覽なさい。」

余氏はにやにや笑ひながら、次の局票を書き始めた。氏の日本語の達者な事は、嘗て日支兩國語の卓上演説が何かやつて、お客の徳富蘇峰氏を感服させたとか云ふ位である。

その内に我我、——余氏と波多君と村田君と私とが食卓のまはりへ坐ると、まつさきに

愛春と云ふ美人が来た。これは如何にも利巧さうな、多少日本の女學生めいた、品の好い丸顔の藝者である。なりは白い織紋のある、薄紫の衣裳に、やはり何か模様の出た、青磁色の補子だった。髪は日本の御下げのやうに、根もとを青い紐に括つたきり、長長と後に垂らしてゐる。額に劉海（前髪）が下つてゐる所も、日本の少女と違はないらしい。その外胸には翡翠の蝶、耳には金と眞珠との耳環、手頸には金の腕時計が、いづれもきらきら光つてゐる。

十六 南國の美人（中）

私は大いに敬服したから、長い象牙箸を使ふ間も、つらつらこの美人を眺めてゐた。しかし料理がそれからそれへと、食卓の上へ運ばれるやうに、美人も續續とはいつて来る。到底一愛春ばかりに、感歎してゐるべき場合ぢやない。私はその次にはいつて来た、時鴻と云ふ藝者を眺め出した。

この時鴻と云ふ藝者は、愛春より美人ぢやない。が、全體に調子の強い、何處か田園の匂を帯びた、特色のある顔をしてゐる。髪を御下げに括つた紐が、これは桃色をしてゐる外に、全然愛春と變りはない。着物には濃い紫緞子に、銀と藍と織りませた、五分程の縁がついてゐる。余君毅民の説明によると、この妓は江西の生まれだから、なりも特に時流を追はず、古風を存してゐるのだと云ふ。さう云へば紅や白粉も、素颜自慢の愛春よりも遙に濃艶を極めてゐる。私はその腕時計だの（左の胸の）、金剛石の蝶だの、大粒の眞珠の首飾りだの、右の手だけに二つ嵌めた寶石入りの指環だのを見ながら、いくら新橋の藝者でも、これ程燦然と着飾つたのは、一人もあるまいと感心した。

時鴻の次にはいつて来たのは、——さう一書き立ててゐては、如何に私でもくたびれるから、跡は唯その中の二人だけをちよいと紹介しよう。その一人の洛娘と云ふのは、貴州の省長王文華と結婚するばかりになつてゐた所、王が暗殺された爲に、今でも藝者をしてゐると云ふ、甚薄命な美人だった。これは黒い紋緞子に、匂の好い白蘭花を挿んだき

り、全然何も着飾つてゐない。その年よりも地味ななりが、涼しい腫の持ち主だけに、如何にも清楚な感じを興へた。もう一人はまだ十二三のおとなしさを少女である。金の腕環や眞珠の首飾りも、この藝者がしてゐるのを見ると、玩具のやうにしか思はれない。しかも何とかからかはれると、世間一般の處子のやうに、恥しさうな表情を見せる。それが又不思議な事には、日本人だと失笑に堪へない、天竺と云ふ名の主人公だつた。

これらの美人は順順に、局票へ書いた客の名通り、我我の間に席を占める。が、私が呼んだ筈の、嬌名一代を壓した林黛玉は、容易に姿を現さない。その内に秦樓と云ふ藝者が、のみかけた紙巻を持つたなり、西皮調の汾河灣とか云ふ、宛轉たる唄をうたひ出した。藝者が唄をうたふ時には、胡弓に合はせるのが普通らしい。胡弓弾きの男はどう云ふ訣か、大抵胡弓を弾きながらも、殺風景を極めた鳥打帽や中折帽をかぶつてゐる。胡弓は竹のすんど切りの胴に、蛇皮を張つたのが多かつた。秦樓が一曲うたひやむと、今度は時鴻の番である。これは胡弓を使はずに自ら琵琶を弾じながら、何だか寂しい唄をうたつた。江西

と云へば彼女の産地は、潯陽江上の平野である。中學生じみた感慨に耽ければ、楓葉荻花瑟瑟の秋に、江州の司馬白樂天が、青衫を沾した琵琶の曲は、斯の如きものがあつたかも知れない。時鴻がすむと萍郷がうたう。萍郷がすむと、——村田君が突然立ち上りながら「八月十五、月光明」と、西皮調の武家坡の唄をうたひ始めたのには一驚した。尤もこの位器用でなければ、君程複雑な支那生活の表裏に通曉する事は出来ないかも知れない。

林黛玉の梅逢春がやつと一座に加はつたのは、もう食卓の饜の饜の湯が、荒らされてしまつた後だつた。彼女は私の想像よりも、餘程娼婦の型に近い、まるまると肥つた女である。顔も今では格段に、美しい器量とは思はれない。頬紅や黛を粧つてゐても、往年の麗色を思はせるのは、細い眼の中に漂つた、さすがにあでやかな光だけである。しかし彼女の年齢を思ふと、——これが行年五十八歳とは、どう考へても謔のやうな氣がする。まづ一見した所は、精精四十としか思はれない。殊に手などは子供のやうに、指のつけ根の關節が、ふつくりした甲にくぼんでゐる。なりは銀の縁をとつた、蘭花の黒緞子の衣裳に

同じ鞞形の襦子だつた。それが耳環にも腕環にも、胸に下げた牌にも、べた一面に金銀の臺へ、翡翠と金剛石とを嵌めこんでゐる。中でも指環の金剛石などは、雀の卵程の大きさがあつた。これはこんな大通りの料理屋に見るべき姿ぢやない。罪悪と豪奢とが入り交つた、たとへば「天鵞絨の夢」のやうな、谷崎潤一郎氏の小説中に、髣髴さるべき姿である。しかしいくら年はとつても、林黛玉は畢に林黛玉である。彼女が如何に才氣があるか、それは彼女の話振りでも、すぐに想像が出来さうだつた。のみならず彼女が何分かの後、胡弓と笛とに合はせながら、秦腔の唄をうたひ出した時には、その聲と共に迷る力も、確に群妓を壓してゐた。

十七 南國の美人 (下)

「どうです、林黛玉は？」
彼女が席を去つた後、余氏は私にかう尋ねた。

「女傑ですね。第一若いのに驚きました。」

「あの人は何でも若時い分に眞珠の粉末を呑んでゐたさうです。眞珠は不老の薬ですからね。あの人は鴉片を呑まない、もつと若くも見える人ですよ。」

その時はもう林黛玉の跡に、新に來た藝者が坐つてゐた。これは色の白い、小造りな、御嬢様じみた美人である。寶盡しの模様を織つた、薄紫の緞子の衣裳に、水晶の耳環を下げてゐるのも、一層この妓の品の好さを助けてゐるのに違ひない。早速名前を尋ねて見たら、花寶玉と云ふ返事があつた。花寶玉、——この美人がこの名を發音するのは宛然たる鳩の啼き聲である。私は巻煙草をとつてやりながら、「布穀催春種」と云ふ杜少陵の詩を思ひ出した。

「芥川さん。」

余氏は老酒を勧めながら、言ひ憎さうに私の名を呼んだ。

「どうです、支那の女は？ 好きですか？」

「何處の女も好きですが、——支那の女も綺麗ですね。」

「何處が好いと思ひますか？」

「さうですね。一番美しいのは耳かと思ひます。」

實際私は支那人の耳に、少からず敬意を拂つてゐた。日本の女は其處に來ると、到底支那人の敵ではない。日本人の耳には平すぎる上に、肉の厚いのが澤山ある。中には耳と呼ぶよりも、如何なる因果か顔に生えた、木の子のやうなものも少くない。按ずるにこれは、深海の魚が、盲目になつたのと同じ事である。日本人の耳は昔から、油を塗つた鬢の後に、すつと姿を隠して來た。が、支那の女の耳は、何時も春風に吹かれて來たばかりか、御丁寧にも寶石を嵌めた耳環なぞさへぶら下げてゐる。その爲に日本の女の耳は、今日のやうに墮落したが、支那のは自然と手入れの届いた、美しい耳になつたらしい。現にこの花寶玉を見ても、丁度小さい貝殻のやうな、世にも愛すべき耳をしてゐる。西廂記の中の鶯鶯が「他釵彈玉斜橫。髻偏雲亂挽。日高猶自不明眸。暢好是懶懶。半晌擡身。幾回搔耳。一

聲長歎。」と云ふのも、きつとかう云ふ耳だつたのに相違ない。笠翁は昔詳細に、支那の女の美を説いたが、(偶集卷之三、聲容部)未嘗この耳には、一言も述べる所がなかつた。この點では偉大な十種曲の作者も、當に芥川龍之介に、發見の功を譲るべきである。

耳の説を辯じた後、私は他の三君と一しよに、砂糖のはいつた粥を食つた。其から妓館を見物しに、賑かな三馬路の往來へ出た。

妓館は大抵横へ切れた、石疊みの露路の兩側にある。余氏は我我を案内しながら、軒燈の名前を讀んで行つたが、やがて或家の前へ來ると、さつさと中へはいつて行つた。はいつた所には不景氣な土間に、身なりの悪さうな支那人どもが、飯を食つたり何かしてゐる。これが藝者のゐる家とは、前以て聞いてゐない限り、誰でも謔としか思はれまい。しかしすぐに階段を上ると、小じんまりした支那のサロンに、明るい電燈が輝いてゐる。紫檀の椅子を並べたり、大きな鏡を立てたりした所は、さすがに一流の妓館らしい。青い紙を貼つた塗にも、硝子を入れた南畫の額が、何枚もずらりと懸つてゐる。

「支那の藝者の檀那になるのも、容易な事ぢやありませんね。何しろこんな家具類さへ、みんな買つてやるのですから。」

余氏は我々と茶を飲みながら、いろいろ標界の説明をした。

「まあ今夜来た藝者なぞだと、どうしても檀那になるまでに、五百圓位は入るでせう。」

その間にさつきの花寶玉が、ちよいと次の間から顔を出した。支那の藝者は座敷へ出て

も、五分ばかりすると歸つてしまふ。小有天にゐた花寶玉が、もう此處にゐるのも不思議

はない。のみならず支那では檀那なるものが、——後は井上紅梅氏著「支那風俗卷之上、

花柳語彙」を参照するが好い。

我我は二三人の藝者と一しよに、西瓜の種を撮んだり、御先煙草をふかしたりしながら少時の間無駄話をした。尤も無駄話をしたと云つても、私は啞に變りはない。波多君が私を指さしながら、悪戯さうな子供の藝者に「あれは東洋人ぢやないぜ。廣東人だぜ。」とか何とか云ふ。藝者が村田君に、本當かと云ふ。村田君も「さうだ。さうだ。」と云ふ。そんな

な話を聞きながら、私は獨り漫然とくだらない事を考へてゐた。——日本にトコトンヤレナと云ふ唄がある。あのトンヤレナは事によると、東洋人の變化かも知れない。……

二十分の後、やや退屈を覺えた私は、部屋の中をあちこち歩いた次手に、そつと次の間

を覗いて見た。すると其處の電燈の下には、あの優しい花寶玉が、でつぶり肥つた阿嬢と

一しよに、晚餐の食卓を圍んでゐた。食卓には皿が一枚しかない。その又一つは茶ばかり

である。花寶玉はそれでも熱心に、茶碗と箸とを使つてゐるらしい。私は思はず微笑し

た。小有天に来てゐた花寶玉は、成程南國の美人かも知れない。しかしこの花寶玉は、

一菜根を嚙んでゐる花寶玉は、蕩兒の頑弄に任すべき美人以上の何物かである。私はこの

時支那の女に、初めて女らしい親しみを感じた。

十八 李人傑氏

「村田君と共に李人傑氏を訪ふ。李氏は年未二十八歳、信條よりすれば社會主義者、上海

に於ける「若き支那」を代表すべき一人なり。途上電車の窓より、青青たる街路の樹、既に夏を迎へたるを見る。天陰、稀に日色あり。風吹けども塵を揚げず。」
 これは李氏を訪ねた後、書き留めて置いた手控へである。今手帳をあけて見ると、走り書きにした鉛筆の字が、消えかかつたのも少くない。文章は勿論蕪雜である。が、當時の心もちは、或はその蕪雜な所に、反つてはつきり出てゐるかも知れない。
 「儼あり。直に予等を引いて應接室に到る。長方形の卓一、洋風の椅子二三、卓上に盤あり。陶製の果物を盛る。この梨、この葡萄、この林檎、——この拙き自然の摸倣以外に、一も目を慰むべき裝飾なし。然れども室に塵埃を見ず。簡素の氣に満てるは愉快なり。
 「數分の後、李人傑氏來る。氏は小づくりの青年なり。やや長き髪。細面。血色は餘り宜しからず。才氣ある眼。小さな手。態度は頗る眞摯なり。その眞摯は同時に又、鋭敏なる神經を想察せしむ。利那の印象は悪しからず。恰も細且強靱なる時計の彈機に觸れしが如し。卓を隔てて予と相對す。氏は鼠色の大掛兒を着たり。」

李氏は東京の大學にゐたから、日本語は流暢を極めてゐる。殊に面倒な理窟なども、はつきり相手に會得させる事は、私の日本語より上かも知れない。それから手控へには書いてないが、我々の通つた應接室は、二階の梯子が部屋の間へ、ぢかに根を下した構造だつた。その爲に梯子を下つて來ると、まづ御客には足が見える。李人傑氏の姿にしても、まつさきに見たのは支那靴だつた。私はまだ李氏以外に、如何なる天下の名士と雖も、足からさきへ相見した事はない。
 「李氏云ふ。現代の支那は如何にすべきか？ この問題を解決するものは、共和にあらず復辟にあらず。這般の政治革命が、支那の改造に無力なるは、過去既に之を證し、現在亦之を證す。然らば吾人の努力すべきは、社會革命の一途あるのみと。これは文化運動を宣傳する「若き支那」の思想家が、いづれも呼號する主張なり。李氏又云ふ。社會革命を齎さんとせば、プロバガンダに依らざるべからず。この故に吾人は著述するなり。且覺醒せる支那の士人は、新しき智識に冷淡ならず。否、智識に餓をつつあり。然れどもこの餓を充

すべき書籍雜誌に乏しきを如何。予は君に斷言す。刻下の急務は著述にありと。或は李氏の言の如くならん。現代の支那には民意なし。民意なくんば革命生ぜず。況んやその成功をや。李氏又云ふ。種子は手にあり。唯萬里の荒蕪、或は力の及ばざらんを懼る。吾人の肉體、この勞に堪ふるや否や、憂ひなきを得ざる所以なりと。言ひ畢つて眉を撃む。予は李氏に同情したり。李氏又云ふ。近時注目すべきものは、支那銀行團の勢力なり。その背後の勢力は問はず、北京政府が支那銀行團に、左右せられんとする傾向あるは、打消し難き事實なるべし。こは必しも悲しむべきにあらず。何となれば吾人の敵は——吾人の砲火を集中すべき的は、一銀行團に定まればなりと。予云ふ。予は支那の藝術に失望したり。予が眼に入れる小説繪畫、共に未だ談ずるに足らず。然れども支那の現状を見れば、この土に藝術の興隆を期する、期するの寧ろ誤れるに似たり。君に問ふ、プロバガンダの手段以外に、藝術を顧慮する餘裕ありやと。李氏云ふ。無きに近しと。」

私の手控へはこれだけである。が、李氏の話しぶりは、如何にもきびきびしたものだつ

た。一しよに行つた村田君が「あの男は頭が好かもんなあ。」と感歎したのも不思議ぢやない。のみならず李氏は留學中、一二私の小説を讀んだとか何とか云ふ事だつた。これも確に李氏に對する好意を増したのに相違ない。私のやうな君子人でも、小説家などと云ふものは、この位虚榮を求める心が、旺盛に出來上つてゐるものである。

十九 日本人

上海紡績の小島氏の所へ、晩飯に呼ばれて行つた時、氏の社宅の前の庭に、小さな櫻が植わつてゐた。すると同行の四十起氏が「御覽なさい。櫻が咲いてゐます。」と云つた。その又言ひ方には不思議な程、嬉しさうな調子がこもつてゐた。玄關に出でゐた小島氏も、もし大袈裟に形容すれば、亞米利加歸りのコロムプスが、土産でも見せるやうな顔色だつた。その癖櫻は瘦せ枯れた枝に、乏しい花しかつけてゐなかつた。私はこの時兩先生が、何故こんな大喜びをするのか、内心妙に思つてゐた。しかし上海に一月程ゐると、これは

兩氏ばかりぢやない、誰でもさうだと云ふ事を知つた。日本人はどう云ふ人種か、それは私の知る所ぢやない。が、兎に角海外に出ると、その八重たると一重たるとを問はず、櫻の花さへ見る事が出来れば、忽ち幸福になる人種である。

X

同文書院を見に行つた時、寄宿舎の二階を歩いてゐると、廊下のつき當りの窓の外に、青い穂麥の海が見えた。その麥畑の處處に、平凡な菜の花の群つたのが見えた。最後にそれ等のすつと向うに、——低い屋根が續いた上に、大きな鯉幟のあるのが見えた。鯉は風に吹かれながら、鮮かに空へ翻つてゐた。この一本の鯉幟は、忽ち風景を變化させた。私は支那にゐるのぢやない。日本にゐるのだと云ふ氣になつた。しかしその窓の側へ行つたら、すぐ目の下の麥畑に、支那の百姓が働いてゐた。それが何だか私には、怪しからんやうな氣を起させた。私は遠い上海の空に、日本の鯉幟を眺めたのは、やはり多少愉快だつたのである。櫻の事などは笑へないかも知れない。

X

上海の日本婦人俱樂部に、招待を受けた事がある。場所は確か佛蘭西租界の、松本夫人の邸宅だつた。白い布をかけた圓卓子。その上のシネリアの鉢、紅茶と菓子とサンドウイツチと。——卓子を圍んだ奥さん達は、私が豫想してゐたよりも、皆温良貞淑さうだつた。私はさう云ふ奥さん達と、小説や戯曲の話をした。すると或奥さんが、かう私に話しかけた。

「今月中央公論に御出しになつた「鴉」と云ふ小説は、大へん面白うございました。」

「いえ、あれは悪作です。」

私は謙遜な返事をしながら、「鴉」の作者宇野浩二に、この問答を聞かせてやりたいと思つた。

X

南陽丸の船長竹内氏の話に、漢口のバンドを歩いてゐたら、篠懸の並木の下のベンチに、

英吉利だか亞米利加だかの船乗が、日本の女と坐つてゐた。その女は一目見ても、職業がすぐわかるものだった。竹内氏はそれを見た時に、不快な氣もちがしたさうである。私はその話を聞いた後、北四川路を歩いてゐると、向うへ來かかつた自動車の中に、三人か四人の日本の藝者が、一人の西洋人を擁しながら、頻にはしやいでゐるのを見た。が、別段竹内氏のやうに、不快な氣もちにはならなかつた。が、不快な氣もちになるのも、まんなら理解に苦しむ訣ぢやない。いや、寧ろさう云ふ心理に、興味を持たずにはゐられないのである。この場合は不快な氣持だけだが、もしこれを大にすれば、愛國的義憤に違ひないぢやないか？

X

何でもXと云ふ日本人があつた。Xは上海に二十年住んでゐた。結婚したのも上海である。子が出来たのも上海である。金がたまつたのも上海である。その爲かXは上海に熱烈な愛着を持つてゐた。たまに日本から客が來ると、何時も上海の自慢をした。建築、道路、

料理、娛樂、——いづれも日本は上海に若かない。上海は西洋も同然である。日本などに離脱してゐるより、一日も早く上海に來給へ。——さう客を促しさへした。そのXが死んだ時、遺言状を出して見ると、意外な事が書いてあつた。——「骨は如何なる事情ありとも、必日本に埋むべし。……」

私は或日ホテルの窓に、火のついたハヴァナを啣へながら、こんな話を想像した。Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我我はかう云ふ點になると、大抵Xの仲間なのである。

二十 徐家匯

明の萬歴年間。牆外。處處に柳の立木あり。牆の彼方に天主堂の屋根見ゆ。その頂の黄金の十字架、落日の光に輝けり。雲水の僧一人、村の童と共に出で來る。

雲水。徐公の御屋敷はあすこかい？
童。あすこだよ。あすこだけれど——叔父さんはあすこへ行つたつて、御齋の御馳走に

はなれないぜ、殿様は坊さんが大嫌ひだから。――

雲水。よし。よし。そんな事はわかつてゐる。

童。わかつてゐるのなら、行かなければ好いのに。

雲水。(苦笑) お前は中中口が悪いな。私は掛錫を願ひに行くのぢやない。天主教の坊

さんと問答をしにやつて来たのだ。

童。さうかい。ぢや勝手によし。御家来たちに打たれても知らないから。――

童走り去る。

雲水。(獨白) あすこに堂の屋根が見えるやうだが、門は何處にあるのかしら。

紅毛の宣教師一人、驢馬に跨りつつ通りかかる。後に僕一人従ひたり。

雲水。もし、もし。

宣教師驢馬を止む。

雲水。(勇猛に) 什麼の處より来る？

宣教師。(不審さうに) 信者の家に行つたのです。

雲水。黄巢過ぎて後、還つて劍を收得するや否や？

宣教師呆然たり。

雲水。遷つて劍を收得するや否や？ 道へ。道へ。道はなければ、――

雲水如意を揮ひ、將に宣教師を打たんとす。僕雲水を突き倒す。

僕。氣違ひです。かまはずに御出なさいまし。

宣教師。可哀さうに。どもう眼の色が妙だと思つた。

宣教師等去る。雲水起き上る。

雲水。忌しい外道だな。如意まで折つてしまひ居つた。鉢は何處へ行つたかしら。

牆内よりかすかに讚頌の聲起る。

X

X

X

X

X

清の雍正年間。草原。處處に柳の立木あり。その間に荒廢せる禮拜堂見ゆ。村の娘三人、

いづれも籃を腕にかけつつ、蓬などを摘みつつあり。

甲。雲雀の聲がうるさい位だわね。

乙。ええ。——あら、いやな蜥蜴だ事。

甲。姉さんの御嫁入りはまだ？

乙。多分來月になりさうだわ。

丙。あら、何でせう、これは？（土にまみれたる十字架を拾ふ。丙は三人中、最も年少なり。）人の形が彫つてあるわ。

乙。どれ？ ちよいと見せて頂戴。これは十字架と云ふものだわ。

丙。十字架つて何の事？

乙。天主教の人の持つものだわ。これは金ぢやないかしら？

甲。およしなさいよ。そんな物を持つてゐたり何かすると、又張さんのやうに首が斬られるわ。

丙。ぢや元の通り埋て置ませうか？

甲。えね、その方が好くはなかつて？

乙。さうねえ。その方が間違ひなさうだわね。

娘等去る。數時間の後、暮色次第に草原に迫る。丙、盲目の老人と共に出て来る。

丙。この邊だつたわ。お祖父さん。

老人。ぢや早く捜しておくれ。邪魔がはいるといけないから。

丙。ほら、此處にあつたわ、これでせう？

新月の光。老人は十字架を手にする儘、徐に黙禱の頭を垂る。

中華民國十年。麥畑の中に花崗石の十字架あり。柳の立木の上に、天主堂の尖塔、屹然と雲端を摩せるを見る。日本人五人、麥畑を縫ひつつ出で来る。その一人は同文書院の學生なり。

甲。あの天主堂は何時頃出来たものでせう？
乙。道光の末ださうですよ（案内記を開きつつ）奥行二百五十呎、幅百二十七呎、あの塔の高さは百六十九呎ださうです。

學生。あれが墓です。あの十字架が、――

甲。成程、石柱や石獸が残つてゐるのを見ると、以前はもつと立派だつたのでせうね。

丁。さうでせう。何しろ大臣の墓ですから。

學生。この煉瓦の臺座に、石が嵌めこんであるでせう。これが徐氏の墓誌銘です。

丁。明故少保加贈大保禮部尙書兼文淵閣大學士徐文定公墓前十字記とありますね。

甲。墓は別にあつたのでせうか？

乙。さあ、さうかと思ひますが、――

甲。十字架にも銘がありますね。十字聖架萬世瞻依か。

丙。（遠方より聲をかける。）ちよいと動かずにゐてくれ給へ。寫眞を一枚とらせて貰ふ

から。

四人十字架の前に立つ。不自然なる數秒の沈黙。

二十一 最後の一瞥

村田君や波多君が去つた後、私は巻煙草を啣へた儘、鳳陽丸の甲板へ出て見た。電燈の明い波止場には、もう殆ど人影も見えない。その向うの往來には、三階か四階の煉瓦建が、ずつと夜空に聳えてゐる。と思ふと苦力が一人、鮮かな影を落しながら、目の下の波止場を歩いて行つた。あの苦力と一しよに行けば、何時か護照を貰ひに行つた日本領事館の門の前へ、自然と出てしまふのに相違ない。

私は静かな甲板を、船尾の方へ歩いて行つた。此處から川下を眺めると、バンドに沿うた往來に、點點と灯が燦いてゐる。蘇州河の口に渡された、晝は車馬の絶えた事のないガアドン・ブリツヂは見えないかしら。その橋の袂の公園は、若葉の色こそ見えないが、あ

すこに群つた木立ちらしい。この間あすこに行つた時には、白白と噴水が上つた芝生に、S・M・Cの赤半被を着た、背むしのやうな支那人が一人、巻煙草の殻を拾つてゐた。あの公園の花壇には、今でも鬱金香や黄水仙が、電燈の光に咲いてゐるであらうか？ 向うへあすこを通り抜けると、庭の廣い英吉利領事館や、正金銀行が見える筈である。その横を川傳ひにまつ直行けば、左へ曲る横町に、ライシナム・シアタアも見えるであらう。あの入り口の石段の上には、コミック・オペラの畫看板はあつても、もう人出入は跡絶えたかも知れない。其處へ一臺の自動車が、まつ直ぐに河岸を走つて来る。薔薇の花、絹、頸飾りの琥珀、——それらがちらりと見えたと思ふと、すぐに眼の前から消えてしまふ。あれはきつとカルトン・カツフェへ、舞踏に行つてゐたのに違ひない。その跡は森とした往來に、誰か小唄をうたひながら、靴音をさせて行くものがある。Chin chin Chinaman——私は暗い黄浦江の水に、煙草の吸ひさしを抛りこむと、ゆつくりサロンへ引き返した。サロンにもやはり人影はない。唯絨氈を敷いた床に、鉢物の蘭の葉が光つてゐる。私は

長椅子によりかかりながら、漫然と回想に耽り出した。——吳景濂氏に會つた時、氏は大きな一分刈の頭に、紫の膏藥を貼りつけてゐた。さうして其處を氣にしながら、「腫物が出来ましてね。」とこぼしてゐた。あの腫物は直つたかしら？——酔歩蹣跚たる四十起氏と、暗い往來を歩いてゐたら、丁度我の頭の上に、直四角の小窓が一つあつた。窓は雨雲の垂れた空へ、斜に光を射上げてゐた。さうして其處から小鳥のやうに、若い支那の女が一人目の下の我我を見下してゐる。四十起氏はそれを指さしながら「あれです、廣東婢は。」と教へてくれた。あすこには今夜も不相變、あの女が顔を出してゐるかも知れない。——樹木の多い佛蘭西租界に、輕快な馬車を走らせてゐると、すつと前方に支那の馬丁が、白馬二頭を引つ張つて行く。その馬の二頭がどう云ふ訣か、突然地面へころがつてしまつた。すると同乗の村田君が「あれは背中が掻いんだよ。」と、私の疑念を晴らしてくれた。——そんな事を思ひ續けながら、私は煙草の箱を出しに、間着のポケットへ手を入れた。が、つかみ出したものは、黄色い埃及の箱ではない、先夜其處に入れ忘れた、支那の芝居の戯

單である。と同時に戲單の中から、何かほろりと床へ落ちた。何か、——一瞬間の後
 私は素枯れた白蘭花を拾ひ上げてゐた。白蘭花はちよいと嗅いで見たが、もう匂さへ残
 つてゐない。花びらも褐色に變つてゐる。「白蘭花、白蘭花」——さう云ふ花賣りの聲を聞
 いたのも、何時か追憶に過ぎなくなつた。この花が南國の美人の胸に、匂つてゐるのを眺
 めたのも、今では夢と同様である。私は手輕な感傷癖に、墮し兼ねない危険を感じながら、
 素枯れた白蘭花を床へ投げた。さうして巻煙草へ火をつけると、立つ前に小島氏が送つて
 くれた、メリイ・ストオプスの本を読み始めた。

江南遊記

前置き

私わたしはつい昨日きのふの朝あさ、本郷臺ほんがうだいから藍染橋あゐぞめばしへ、ぶらぶら坂さかを下くだつて行いつた。すると二人ふたりの青
 年紳士せんとしが、反對はんたいにその坂さかを登のぼつて來きた、私も男をとこの淺間あさましさに、すれ違ちがふ相手あひてが女性ぢよせいでない
 と、滅多めつたに行人かうじんには注意ちういしない。が、この時ときはどう云いふ訣わけか、まだ五六間距離けんきよりのある内うちか
 ら、相手あひての風采ふうさいに氣きをつけてゐた。殊ことにその一人ひとりが薄青うすあをい背廣せひろに、雨外套あまぐわいたうをひつかけたの
 には、血色けつしよくの好よい瓜實顔うりざねがほや、細ほそい銀ぎんの柄つゑの杖つゑと共に、瀟洒しょうしゃたる趣おもむきを感じかんじてゐた。二人ふたりは
 何か話はなしながら、ゆつくり足を運はこんで來くる。——それが愈いよいよすれ違ちがつた時とき、私わたしの耳みみは意外いぐわい
 にも、卒然そつぜん嘍喲アイヨオと云いふ間投詞かんとうしを捉とらへた。嘍喲アイヨオ！ 私わたしは心こころの躍はなるのを感じかんじた。それは何なにも彼
 等二人ふたりが、支那人しなじんだつたのに驚おどろいたのではない。この偶然ぐうぜん耳みみにした嘍喲アイヨオと云いふ言葉ことばの爲ために
 いろいろな記憶きおくがよみがへつたのである。

私は北京の紫禁城を思つた。洞庭湖に浮んだ君山を思つた。南國の美人の耳を思つた。雲崗や龍門の石佛を思つた。京漢鐵道の南京蟲を思つた。廬山の避暑地、金山寺の塔、蘇小小の墓、秦淮の料理屋、胡適氏、黃鶴樓、大門牌の煙草、梅蘭芳の嫦娥を思つた。同時に又腸胃の病の爲に、三月ばかり中絶してゐた、私の紀行の事をも思つた。

私は彼等を振り返つた。彼等は勿論悠悠と不相變何か話しながら、霜晴れの坂を登つて行つた。しかし私の耳の中には、未だ啞喲の聲が残つてゐる。彼等は何處の下宿から、何處へ出かける途中であらう？事によると彼等の一人は、「留東外史」の張全のやうに、戸山ヶ原の雜木林へ、女學生をつれ出す所かも知れない。さう云へばもう一人の留學生も、同じ小説の王甫察のやうに、馴染の藝者位はありさうである。私はこんな彼等にとつては失禮な想像を逞しくしながら、藍染橋の停留場へ出ると、田端の家へ歸る爲に、動坂行きの電車に乗つた。

處が家へ歸つて見ると、大阪の社から電報が來てゐた。文句は「ゲンコウヲタノミマス」

である。私は度度薄田氏に、迷惑をかけるのに恐縮した。しかし正直に白状すれば、重恐れ入りながらも、腹の工合が悪かつたり、寝不足が何日も續いたり、感興がなかつたりする所から、ペンを執らない事もないではない。それがこの電報を見た時は、明日にも早速「上海遊記」の續篇を書き出さうと云ふ氣になつた、啞喲！ さう云ふ聲が私の耳に、忘れない響を残したのは、薄田氏の爲にも私の爲にも、意外な仕合せになつた訣である。私の知つてゐる支那語の数は、やつと二十六しかない。その中の一つが偶然にも、私の耳に止まつたばかりか、兎に角何かを目ざめさせた事は、大袈裟に云へば天恵である。尤も私の悪文の爲に惱まされる讀者の身になれば、天恵より寧ろ天災かも知れない。しかし天災と考へれば、讀者も諦め易さうである。かたがた啞喲の聲を耳にしたのは、御互に感謝して然るべきであらう。これが本文へとりかかる前に、かう云ふ前置きを加へる所以である。

一車中

杭州行きの汽車へ乗つてゐたら、車掌が切符を検べに來た。この車掌はオリヅ色の洋服に金筋入りの大黒帽をかぶつてゐる。日本の車掌に比べると、何だか敏活な感じがしない。が、勿論さう考へるのは、我我の僻見の祟りである。我我は車掌の風采にさへ、我我の定木を振り廻しやすい。ジョン・ブルは乙に澄まされなければ、紳士でないと思つてゐる。アングル・サムは金がなければ、紳士でないと思つてゐる。ジャツプは、——少くとも紀行文を草する以上、旅愁の涙を落したり、風景の美に見惚れたり、游子のボオズをつくらなければ、紳士でないと思つてゐる。我我は如何なる場合でも、かう云ふ僻見に捉はれてはならん。——私はこの悠悠とした車掌が、切符を検べてゐる間に、かう云ふ僻見論を發表した。尤も支那人の車掌を相手に、氣焔を揚げた訣ではない。案内役に同行した、村田鳥江君に吹きかけたのである。

汽車の外は何時まで行つても、茶畑かげんげ野ばかりである。その中に時々羊がゐたり、白挽き小屋があつたりする。と思ふと大きい水牛も、のそのそ田の畔を歩いてゐた。五六日前やはり村田君と、上海の郊外を歩いてゐたら、突然一頭の水牛に路を塞がれた事がある。私は動物園の柵内は知らず、目のあたりこんな怪物に遭遇した事は始めてだから、つい感心した拍子に、ほんの半歩ばかり退却した。すると忽ち村田君に「臆病だなあ。」と輕蔑された。今日は勿論驚嘆はしない。が、ちよいと珍しかつたから、「君、水牛がゐるぜ。」と云はうとしたが、まあ、泰然と黙つてゐる事にした。村田君もきつとあの瞬間は、私も中支那通になつたと、敬服してゐたに相違ない。

汽車は一室八人の、小さい部屋に分かれてゐる。尤もこの車室には、我我二人の外誰もゐない。室のまん中の卓子の上には、土瓶や茶碗が並べてある。其處へ時々青服の給仕が熱いタオルを持つて來てくれる。乗り心は餘り悪い方ぢやない。但し我我が乗つてゐても、この客車は正に一等である。一等と云へば何時か鎌倉から、ちよいと一等へ乗つた所が、

勿體なくも或宮様と、たつた二人ぎりになつたのには、恐懼の至りに堪へなかつた。しかもあの時持つてゐたのは、白切符だつたか赤切符だつたか、其邊も實は確ぢやない。……

二車中 (承前)

その中に汽車は嘉興を過ぎた。ふと窓の外を覗いて見ると、水に臨んだ家家の間に、高々と反つた石橋がある。水には兩岸の白壁も、はつきり映つてゐるらしい。その上南畫に出て来る船も、二三艘水際に繋いである、私は芽を吹いた柳の向うに、こんな景色を眺めた時、急に支那らしい心持になつた。

「君、橋がある。」

私は大威張りにかう云つた。橋ならばまさか水牛のやうに、輕蔑されまいと思つたからである。

「うん、橋がある。ああ云ふ橋は好かもんなあ。」

村田君もすぐに賛成した。

しかしその橋が隠れたと思ふと、今度は一面の桑畑の彼方に、廣告だらけの城壁が見えた。古色蒼然たる城壁に、生々しいペンキの廣告をするのは、現代支那の流行である。無敵牌牙粉、雙嬰孩香烟、——さう云ふ齒磨や煙草の廣告は、沿線到る所の停車場に、殆ど見えなかつたと云ふ事はない。支那は抑如何なる國から、かう云ふ廣告術を學んで來たか？ その答を與へるものは、此處にも諸方に並び立つた、ライオン齒磨だの仁丹だの、俗悪を極めた廣告である。日本は實にこの點でも、隣邦の厚誼を盡したものでない。汽車の外は不相變、茶畑か桑畑かげんげ野である。どうかすると松柏の間に、古塚のあるのが見える事もある。

「君、墓があるぞ。」

村田君は今度は橋の時程、私の興味に應じなかつた。

「我我は同文書院にゐた時分、ああ云ふ墓の崩れたやつから、度度頭蓋骨を盗んで來たで

すよ。」

「盗んで来て何にするのですか？」

「おもちゃにし居つたですよ。」

我我は茶を啜りながら、脳味噌の焦げたのは肺病の薬だとか、人肉の味ば羊肉のやうだとか、野蠻な事を話し合つた。汽車の外には何時の間にか、茨になつた油菜の上に、赤赤と西日が流れてゐる。

三 杭州の一夜 (上)

杭州の停車場へ着いたのは、彼是午後の七時だつた。停車場の柵の外には、薄暗い電燈のともつた下に、税關の役人が控へてゐる。私はその役人の前へ、赤革の鞆を持つて行つた。鞆の中には手當り次第に、書物だのシャツだのボンボンの袋だの、いろいろな物が詰めこんである。役人はさも悲しさうに、一一シャツを畳み直したり、ボンボンのこぼれた

のを拾つたり、鞆の中の整理に着手してくれた。いや、少くともさう見えた程、一通り検査をすませた後は、ちやんと鞆の中が片附いたのである。私は彼が鞆の上へ、白墨の圓を描いてくれた時、「多謝」と支那語の御禮を云つた。が、彼はやはり悲しさうに、又外の鞆を整理しながら、私には眼さへ注がなかつた。

其處にはまだ役人の外にも、宿引きが大勢集まつてゐる。彼等は我我の姿を見ると、口口に何か喚きながら、小さい旗を振り廻したり、色紙の引き札をつきつけたりした。が、我我が泊る筈の、新新旅館の旗なるものは、何處を捜しても見當らない。すると圖圖しい宿引きどもは、滔滔と何か饒舌り立てては、我我の鞆へ手をかけようとする。如何に村田君に怒鳴られた所が、少しも辟易する様子がない。私は勿論この場合も、雀か丘のナポレオンにやうに、悠然と彼等を睥睨してゐた。しかし何分か待たされた後、怪しげな背廣を一着した新新旅館の宿引きが、やつと我我の前に現れた時には、やはり正直な所は嬉しかつた。

我我は宿引きの命令通り、停車場前の人力車に乗った。車は梶棒を上げたと思ふと、いきなり狭い路へ飛びこんだ。路は殆どまっ暗である。敷石は凸凹を極めてゐるから、車の揺れるのも一通りではない。その中に一度芝居小屋があるのか、騒々しい銅鑼の音を聞いた事がある。が、其處を通り過ぎた後は、人聲一つ聞えて来ない。唯生暖い夜の町に、我我の車の音ばかりがする。私は葉巻を啣へながら、何時か亞刺比亞夜話じみた、ロマンティックな氣もちを弄び始めた。

その内に路が廣くなると、時時戸口に電燈をともした、大きい白壁の邸宅が見える。——と云つたのでは意を盡さない。始は唯闇の中から、朦朧と白い物が浮き上つて来る。その次にそれが星のない夜空に、はつきり聳え立つた白壁になる。それから壁を切り抜いた、細長い戸口が現れて来る。戸口には赤い標札の上に、電燈の光が當つてゐる。——と思ふと戸口の奥にも、電燈のともつた部屋が見える。聯、瑠璃燈、鉢植ゑの薔薇、どうかすると人の姿も見える。このちらりと眼にはいる、明るい邸宅の内部程、不思議に美しい

物は見た事がない。其處には何か私の知らない、秘密な幸福があるやうな氣がする。スマトラの忘れな草、鴉片の夢に見る白孔雀——何かそんな物があるやうな氣がする。古來支那の小説には、深夜路に迷つた孤客が、堂堂たる邸宅に泊めて貰ふ。處が翌朝になつて見ると、大厦高樓と思つたのは、草の茂つた古塚だつたり、山陰の狐の穴だつたりする、——さう云ふ種類の話が多い。私は日本にゐる間、この種類の鬼狐の譚も、机上の空想だと思つてゐた。處が今になつて見ると、それはたとひ空想にしても、支那の都市や田園の夜景に、然るべき根ざしを持つてゐる。夜の底から現れて来る、燈火に満ちた白壁の邸宅、——その夢のやうな美しさには、古今の小説家も私と同様、超自然を感じたのに相違ない。さう云へば今見た邸宅の戸口には、隴西の李膺と云ふ標札があつた。事によるとあの家の中には、昔の儘の李太白が、幻の牡丹を眺めながら、玉盞を傾けてゐるかも知れない。私はもし彼に會つたら、話して見たい事が澤山ある。彼は一體太白集中、どの刊本を正しいとするか？、ジュデイト・ゴオテイエが翻譯した、佛蘭西語の彼の采蓮の曲には、吹き

出してしまふか腹を立てるか？ 胡適氏だとか康白情氏だとか、現代の詩人の白話詩には、どう云ふ見解を持つてゐるか？——そんな出たらめを考へてゐる内に、車は忽ち横町を曲ると、無暗に幅の廣い往來へ出た。

四 杭州の一夜（中）

この往來の兩側には、明るい店店が並んでゐる。が、人通りは疎らだから、少しも陽気な心もちがしない。寧ろ町幅が廣いだけに、如何にも支那の新開地らしい、妙な寂しさを與へるだけである。

「これが城外の町、——この突き當りが西湖ですよ。」

後の車に乗つた村田君は、かう私に聲をかけた。西湖！ 私は往來の外れを眺めた。しかしいくら西湖でも、闇夜に鎖されてゐては仕方がない。唯車上の私の顔には、その遙な闇の中から、涼しい風が流れて来る。私は何だか月島あたりへ、十三夜を見にでも來たや

512761

うな氣がした。

車は少時走つた後、とうとう西湖のほとりへ出た。其處には電燈をつけ並べた、大きい旅館が二三軒ある。が、それもさつきの店店のやうに、明るい寂しさを加へるに過ぎない。西湖は薄白い往來の左に、暗い水面を廣げたなり、ひっそりと静まり返つてゐる。そのただつ廣い往來にも、我我二人の車の外は、犬の子一つ歩いてゐない。私は晝のやうな旅館の二階に、去來する人影を眺めながら、晩飯だのベッドだの新開だの、——要するに「文明」が戀しくなり出した。しかし車屋は不相變、黙々と走り續けてゐる。路も行人を絶つた儘、何處まで行つても盡きさうぢやない。旅館も、——旅館はもうすつと後になつた。今では唯湖の縁に、柳らしい樹ばかり並んでゐる。

「おい、君、新新旅館はまだ遠いのかね？」

私は村田君を振り返つた。すると村田君の車屋が、咄嗟にその意味を想像したのか、君よりも先に返事をした。

「十里！ 十里！」

私は急に悲しい気がし出した。この上まだ十里も先だとすると、新新旅館に着かない内に、夜が明けてしまふのに相違ない。して見れば今夜は断食である。私はもう一度村田君へ、我ながら情無い聲をかけた。

「十里とは驚いたな。僕は腹が減つて来たがね。」

「わしも減つた。」

村田君は車上に腕組みをした儘、恬然と支那煙草を啣へてゐた。

「十里位何でもないですよ。支那里數の十里だから、——」

私はやつと安心した。が、忽ち又がつかりした。如何に六町一里だと云つても、十里となれば六十町ある。この空腹を抱へながら、まだ日本の一里以上、闇夜の車に揺られるのは、何人にも嬉しい行程ぢやない。私は失望を紛らせる爲に、昔習つた獨逸文法の規則を、一一口の中に繰り返し始めた。

それが名詞から始まつて、強變化動詞に廻りついた時、ふとあたりを透かして見ると、何時か道が狭くなつた上に、樹木なども左右に茂つてゐる。殊に不思議に思はれたのは、その樹の間に飛んでゐる、大きい螢の光だつた。螢と云へば俳諧でも、夏の季節ときまつてゐる。が、今はまだ四月だから、それだけでも妙としか思はれない。おまけにその光の輪は、ぼつと明るくなる度に、あたりの闇が深いせぬか、鬼灯程もありさうな気がする。私はこの青い光に、燐火を見たやうな無氣味さを感じた。と同時にもう一度、ロマンティックな氣もちに涵るやうになつた。しかし肝腎の西湖の夜色は、家の蔭か何かに隠れたらしい。路の左の樹木の向うは、すつと土塚に變つてゐる。

「此處が日本領事館ですよ。」

村田君の聲が聞えた時、車は急に樹樹の中から、なだらかに坂を下り出した。すると、見る見る我我の前へ、薄明るい水面が現れて来た。西湖！ 私は實際この瞬間、如何にも西湖らしい心もちになつた。茫茫と煙つた水の上には、雲の裂けた中空から、幅の狭い月

光が流れてゐる。その水を斜に横ぎつたのは、蘇堤か白堤に違ひない。堤の一箇所には三角形に、例の眼鏡橋が盛り上つてゐる。この美しい銀と黒とは、到底日本では見る事が出来ない。私は車の揺れる上に、思はず體をまつ直にした儘、何時までも西湖に見入つてゐた。

五 杭州の一夜（下）

新新旅館へ廻り着いたのは、その後十分とたたない内だつた。此處は新新と號するだけに、兎に角西洋風のホテルである。が、支那人の給仕と一しよに、狭い裏梯子を登りながら、我々の部屋へ行つて見ると、東洋人と見違つたのか、餘り居心の好い二階ぢやない。第一狭い部屋の中に、寢臺を二臺並べた所は、正に支那の宿屋である。おまけに肝腎の部屋の位置も、丁度ホテルの後の隅だから、坐つた儘西湖を眺めるなど云ふ、贅澤な眞似は到底出来ない。しかし車と空腹とロマンテイズムとにくたびれた私はこの部屋の椅子

へ腰を下すと、やつと人間らしい心もちになつた。

村田君は早速我々の給仕に、食事の支度を注文した。が、食堂はもう締つたから、西洋料理は出来ないといふ。では支那料理と云ふ事になつたが、給仕が持つて来た皿を見るとどうも食ひ残りか何からしい。何でも借樂園主人の説によると、全家寶と稱する支那料理は、食ひ残りの集成だと云ふ事である。私は無氣味になつたから、この幾皿かの支那料理の中、全家寶はないかと尋ねて見た。すると忽ち村田君に、全家寶はこんな物ぢやないですよと、水牛以來の輕蔑をされた。

給仕はこの間も珍しさうに、我々の顔を観きながら、絶えず小うるさい御饒舌をしてゐる。しかも村田君に翻譯して貰ふと、穴の明いた銀貨を持つてゐたら、一枚くれると云ふのだつた。ではその銀貨を何にするかと聞けば、チョコッキの釘にすると云ふのだから、非凡な思ひつきには違ひない。成程さう云はれて見ると、この給仕のチョコッキの釘は、悉穴の明いた銀貨である。村田君はビールを引掛けながら、日本へそのチョコッキを持つて行け

ば、きつと五十銭には賣れるぜなどと、つまらない保證を與へてゐた。

我我は食事をすませた後、下のサロンへ降りて行つた。が、其處には寫眞の額や、安物の家具が並んでゐる外は、一人も客の姿が見えない。唯玄關へ出て見ると、石段の上の卓子のまはりには、ヤンキイの男女が五六人、ぐいぐい酒を煽りながら、大聲に唄をうたつてゐる。殊に禿頭の先生などは、女の腰を抱いた儘、唄の音頭をとる拍子に、何度も椅子ごと倒れさうになつた。

玄關の外には門の左に、玫瑰の棚が出来てゐる。我我はその下に佇みながら、細かい葉の間に簇つた、赤い花を仰いで見た。花は遠い電燈の光に、かすかな匂ひを放つてゐる。それが何だかつやつやと、濡れてゐると思つたら、何時の間にか暗い空は、驟雨に變つてゐるのだつた。玫瑰、微雨、孤客の心——此處までは詩になるかも知れない。が、鼻の先の玄關には、酔つ拂ひのヤンキイが騒いでゐる。私はとてもこの分では「天鷲絨の夢」の作者のやうに、ロマンティックにはなれないと思つた。

其處へ靜かに門の外から、雨に濡れた轎子が二つ、四人の駕籠昇きに昇かれて來た。それが玄關へ横附けになると、まつさきに轎をくぐり出たのは、品の好い支那服の老人である。その次に玄關へ下り立つたのは、——私は正直に白状すると、せめては十人並みの器量だと云ひたい。が、實際はどちらか云へば、寧ろ醜い少女である。しかし青磁色の緞子の衣裳に、耳環の水晶のきらめいてゐるのは、確に風流な心もちがした。少女は老人の指圖通り、出迎へた宿の番頭と一しよに、ホテルの中へはいつてしまふ。老人は後に残つた儘、丁度來合せた我我の給仕に、轎夫の賃銀を拂はせてゐる。この光景を眺めてゐる内に、もう一度私は變節した。これならば谷崎潤一郎氏のやうに、ロマンティックになり了はせる事もどうやら出來さうな氣がしたのである。

しかし結局運命は、私のロマンティズムに残酷だつた。この時突然玄關から、ひよろひよろ石段を下りて來たのは、あの禿頭の亞米利加人である。彼は同類に聲をかけられると、妙な手つきをして見せながら、ブラッテイ何とか返答をした。上海の異人はヴェリイ

の代りに、屢恐る可きブラッディを使ふ。これだけでも既に愉快ぢやない。その上彼は危なさうに、我我の側へ立ち止まるが早い、玄關へ後を向けたなり、傍若無人にも立小便をした。

ロマンティズムよ、さようならである。私は陶然たる村田君と、人氣のないサロンへ引き返した。水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立ちながら。

六 西湖 (一)

ホテルの前の棧橋には、朝日の光に照された、槐の葉の影が動いてゐる。其處に我我を乗せる爲に、畫舫が一艘繋いである。畫舫と云ふと風流らしいが、何處が一體畫舫の畫の字だか、それは未だ判然しない。唯白木綿の日除けを張つたり、眞鍮の手すりをつけたりした、平凡極まる小舟である。その畫舫——兎に角畫舫と教へられたから、今後やはりさう呼ぶつもりだが、——その畫舫は我我を乗せると、好人物らしい船頭の手に、悠悠と

湖水へ漕ぎ出された。

水は思つたより深くはない。萍の漂つた水面から、蓮の芽を出した水底が見える。これは岸に近いせいかと思つたが、何處まで行つても同じ事らしい。まあ、大體の感じを云ふと、湖水なぞと稱へるよりも、大水の田圃に近い位である。聞けばこの西湖なるものは、自然の儘任せだが最後、忽干上つてしまふから、水を外に出さないやうに、無理な工面がしてあるのだと云ふ。私は舟縁に凭りかかりながら、その浅い水底の土に、村田君の杖を突こんでは、時時藻の間に泳いで来る、鯉のやうな魚を嚇かしたりした。

我我の畫舫の向うには、日本領事館のあたりから、湖の中に浮んだ孤山へ、長い堤が連つてゐる。西湖全圖を按ずると、これは昔白樂天の築いた、白堤なるものに相違ない。尤石版刷の畫圖を見ると、柳や何かを描いてあるが、重修した時に伐られたのか、今は唯寂しい沙堤である。その堤に橋が二つあつて、孤山に近いのを錦帯橋と云ひ、日本領事館に近いのを斷橋と云ふ。斷橋は西湖十景の中、残雪の名所になつてゐるから、前人の詩も

少くない。現に橋畔の残雪亭には、清の聖祖の詩碑が建つてゐる。その他楊鐵崖が「段家橋頭猩色酒」と云つたのも、張承吉が「斷橋荒蕪澁」と云つたのも、悉この橋の事である。——と云ふと博學に聞えるが、これは池田桃川氏の「江南の名勝史蹟」に出てゐるのだから、格別自慢にも何にもならない。第一その斷橋は、はあ、あれが斷橋かと遙かに敬意を表したぎり、とうとう舟を寄せずじまつた。が、萍の疎らな湖中に、白白と堤の續いてゐるのは、——殊に其處へ近づいた時、辮髪を垂れた老人が一人、柳の枝を鞭にしなから、悠悠と馬を歩ませてゐたのは、詩中の景だつたのに違ひない。私は樂天の西湖の詩に「半醉閑行湖岸東。馬鞭敲鐙響玲瓏。萬株松樹青山上。十里沙隄明月中。」云云とあるのは、たとひ晝夜を異にするにしても、髣髴出来るやうな心もちがした。勿論この詩も斷橋同様、池田氏の本の孫引きである。

畫舫は錦帶橋をくぐり抜けると、すぐに進路を右に取つた。右は即ち孤山である。これも西湖十景の中の、平湖の秋月と稱するのは、この邊の景色だと教へられたが、晩春の午

前では致し方がない。孤山には金持の屋敷らしい、大きいだけに俗悪な、門や白壁が續いてゐる。其處を一しきり通り過ぎた所に、不思議にも品の好い三層樓があつた。水に臨んだ門も好ければ、左右に並んだ石獅も美しい。これは何物の住居かと思つたら、乾隆帝の行宮の址だと云ふ、評判の高い文瀾閣だつた。此處には金山寺の文字閣（鎮江）や、大觀堂の文瀾閣（楊州）と共に、四庫全書が一部づつ納めてある。おまけに庭も立派だと云ふから、一見の爲岸へ登つたが、どちらも凡人には見せてくれない。我我はやむを得ず岸傳ひに昔の孤山寺、今の廣化寺を瞥見してから、その先にある龕樓へ行つた。

龕樓は龕曲園の別荘である。規模は如何にもこせつてゐるが、滿更悪い住居でもない。東坡の古址にちなんだとか云ふ、伴坡亭の後なぞも、竹や龍の髭の茂つた中に、藻の多い古池が一つあるのは、甚閑寂な心もちがした。その池の側を登つて見ると、所謂曲曲廊の盡きる所に、壁へ嵌めこんだ石刻がある。それが曲園の爲に描いた、彭玉麟の梅花の圖——と云ふよりも本郷曙町の、谷崎潤一郎氏の二階に懸つてゐた、凄じい梅花の圖の原

物だつた。曲曲廊の上の小軒、——扁額によれば碧霞西舎を見た後、我我はもう一度山の下の、伴坡亭へ下つて来た。亭の壁にはべた一面に、曲園だの朱晦庵だの何紹基だの岳飛だの、いろいろの石刷がぶら下つてゐる。石刷もかう澤山あると、格別どれも欲しい気がしない。その正面には額に入れた、髯の長い曲園の寫眞が、難有さうに飾つてある。私はこの家の主人が持つて来た、一碗の茶を啜りながら、つらつら曲園の人相を眺めた。章炳麟氏の翁先生傳によると、これは孫引きをするのではない、「雅性不好聲色既喪母妻終身不食。」云々とある。成程そんな所も見えないではない。「雜流亦時至門下此其所短也。」——さう云へば多少の俗氣もある。事によると翁曲園は、この俗氣があつたおかげに、かう云ふ別荘を拵へてくれる、立派な御弟子たちが出来たのかも知れない。現に一點の俗氣も帯びない、玲瓏玉の如き我我なぞは、未だ別荘を持つどころか、賣文に露命を繋いでゐる。——私は玫瑰のはいつた茶碗を前に、ぼんやり頰杖をついた儘、ちよいと蔭甫先生を輕蔑した。

七 西湖 (二)

その次に蘇小小の墓を見た。蘇小小は錢塘の名妓である。何しろ藝者と云ふ代りに、その後は蘇小と稱へる位だから、墓も古來評判が高い。處が今詣でて見ると、この唐代の美人の墓は、瓦葺きの屋根をかけた、漆喰か何か塗つたらしい、詩的でも何でもない土饅頭だつた。殊に墓のあるあたりは、西冷橋の橋普請の爲に、荒され放題荒されてゐたから、愈々索漠を極めてゐる。少時愛讀した孫子瀟の詩に、「段家橋外易斜曛。芳草凄迷綠似裙。弔罷岳王來弔汝。勝他多少達官墳。」と云ふのがある。が、現在は何處を見ても、裙に似た草色どころの騒ぎぢやない。掘り返された土の上に、痛痛しい日の光が流れてゐる。おまけに西冷橋畔の路には、支那の中學生が二三人、排日の歌か何かうたつてゐる。私は匆匆村田君と、秋瑾女史の墓を一見した後、水際の畫舫へ引き返した。畫舫は岳飛の廟へ向ふ爲に、もう一度西湖へ漕ぎ出された。

「岳飛の廟は好いですよ。古色に富んでゐるですからね。」

村田君は私を慰めるやうに、曾遊の記憶を話してくれた。が、私は何時の間か、西湖に反感を持ち出してゐた。西湖は思つた程美しくはない。少くとも現在の西湖なるものは、去るに忍びざる底のものぢやない。水の浅い事は前にも云つた。が、その上に西湖の自然は、嘉慶道光の諸詩人のやうに、繊細な感じに富み過ぎてゐる。大まかな自然に飽き飽きした、支那の文人墨客には、或は其處が好いのかも知れない。しかし我我日本人は、繊細な自然に慣れてゐるだけ、一應は美しいと考へても、再應は不満になつてしまふ。が、もしこれだけに止まるとすれば、西湖は兎に角春寒を怯れる、支那美人の觀だけはある筈である。處がその支那美人は、湖岸至る所に建てられた、赤と鼠と二色の、俗悪恐るべき煉瓦建の爲に、垂死の病根を興へられた。いや、獨り西湖ばかりぢやない。この二色の煉瓦建は、殆ど大きい南京蟲のやうに、古蹟と云はず名勝と云はず江南一帯に蔓つた結果、悉風景を破壊してゐる。私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西

湖の爲に不平だつたばかりか、女史の靈の爲にも不平だつた。「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉じた鑑湖秋女侠の墓門にしては、如何にも氣の毒に思はれたのである。しかもかう云ふ西湖の俗化は、益々盛になる傾向もないではない。どうも今後十年もたてば、湖岸に並び建つた西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが酔拂つてゐて、その又西洋館の門の前は、一人づつヤンキイが立小便をしてゐる、——と云ふやうな事にもなりさうである、何時か蘇峰先生の「支那漫遊記」を読んでゐたら、氏は杭州の領事にでもなつて、悠悠と餘生を送る事が出来れば、大幸だとか何とか云ふ事だつた。しかし私は領事どころか、浙江の督軍に任命されても、こんな泥池を見てゐるよりは、日本の東京に住んでゐたい。

私が西湖を攻撃してゐる内に、畫舫は跨虹橋をくぐりながら、やはり西湖十景の中の、曲院の風荷あたりへさしかかつた。この邊は煉瓦建も見えなければ、白壁を圍んだ柳などの中に、まだ桃の花も咲き残つてゐる。左に見える趙堤の木蔭に、青青と苔蒸した玉帶橋

が、ぼんやり水に映つてゐるのも、南田の畫境に近いかも知れない。私は此處へ船が來た時、村田君の誤解を招かないやうに、私の西湖論へ増補を施した。

「但し西湖はつまらんと云つても、全部つまらん次第ぢやないがね。」

畫舫は曲院の風荷を過ぎると、岳王廟の前へ止まつた。我我は早速船を跡に、「西湖佳話」以來御馴染の、岳將軍の靈を拜みに出かけた。すると廟は八分ばかり、新しい壁を光らせた儘、泥や砂利の山の中に、改修中の醜さを曝してゐる。勿論村田君を喜ばせた、古めかしい景色などは何處にもない。唯焼け跡のやうな境内には、土方や左官ばかりがうろつてゐる。村田君はカメラを出しかけたなり、落膽したやうに足を止めた。

「これはいかん。かうなつてはもう形なしだ。——ぢや墓へ行つて見よう。」

墓は蘇小小の墓のやうに、漆喰を塗つた土饅頭である。尤もこれは名將だけに、蘇家の麗人のより餘程大きい。墓の前には筆太に、宋岳鄂王之墓と書いた、苔痕斑斑たる碑が立つてゐる。後の竹木の荒れたのも、岳飛の子孫でない我我には、詩趣こそ感ずるが、悲し

い氣はしない。私は墓のまはりを歩きながら、聊か懐古めいた心もちになつた。岳王墳上草萋萋——誰かにそんな句もあつたやうな氣がする。が、これは孫引きではないから、誰の詩だつたか判然しない。

八 西湖 (三)

岳飛の墓前には鐵柵の中に、秦檜張俊等の鐵像がある。像の恰好を按ずると、面縛された所に違ひない。何でも此處に詣でるものは、彼等の姦を憎む爲に、一一これらの鐵像へ、小便をひつかけて行くさうである。しかし今は仕合せと、どの鐵像も濡れてゐない。唯そのまはりの土の上に、青蠅が何匹も止まつてゐる。それが僅に遠來の私に、不潔な暗示を與へるだけだつた。

古來悪人多しと雖も、秦檜程憎まれたものは滅多にない。上海あたりの往來では確か字では油炸塊とか云ふ、棒のやうな油揚を賣つてゐる。あれも宗方小太郎氏の説によると、

秦檜の油揚げと云つたつもりだから、油炸檜と云ふのが本名ださうである。一體民衆と云ふものは、單純なものしか理解しない。支那でも關羽とか岳飛とか、衆望を集めてゐる英雄は、皆單純な人間である。或は單純な人間でないにしても、單純化され易い人間である。この特色を具へてゐない限り、如何に不世出の英雄でも、容易に大向うには持て囃されな。たとへば井伊直弼の銅像が立つには、死後何十年かを要したが、乃木大將が神様になるには、殆一週間も要さなかつたやうなものである。それだけに又敵になると、かう云ふ英雄の敵は憎まれ易い。秦檜は如何なる悪因縁か、見事にこの貧乏圖を引いた。その結果は御覽の通り、中華民國の十年にさへも、散散な取扱ひを受けてゐる。私もこの新年の「改造」に「將軍」と云ふ小説を書いた。しかし日本に生れた難有さには、油揚げの愛目にも遇はなければ、勿論小便もひつかけられない。唯一部分伏せ字になつた上、二度ばかり雑誌の編輯者が、當局に小言を云はれただけである。

次手にどの位秦檜と云へば、憎惡の的になつてゐたか。——その間の消息を語るべき

コントを一つ紹介しよう。これは清人景星杓の「山齋容譚」の中の話である。

X X X X X X X

「何年前になりますか？ 私が江上の或寺に、讀書かたがた住んでゐた時です。突然隣家の婆さんに、何か鬼物が乗り移りました。」

嚴曉蒼は話し出した。

「婆さんは白眼を吊り上げたなり、一家の男女を睨み廻しては、頻にかう罵るので。——わが輩は冥道押使だぞ。今秦檜の魂を押しながら、閻王の府へ赴いた還りだが、途中此處を通りかかると、この死損ひの婆あゝの爲に、汚れ水を着物にかけられた。何とか扱ひをつければよし、さもなければこの婆あは、閻王の御前へ引きすつて行くぞ。……」

「一家の男女は仰天しました。が、婆さんについたのは、實際冥土の使かどうか、それをまづ確める爲に、いろいろ問答をして見たさうです。すると婆さんは不相變、傲然と正面にかまへながら、何でもはきはき返答をしました。して見れば鬼使に相違ない。——かう

云ふ事になりましたから、一家の男女はとりあへず、紙錢に火をつけるやら、地に酒を注ぐやら、百方祈願を凝らしました。御承知の通り冥土の下役も、人界の下役と同じやうに賄賂を使ひさへすれば無事なのです。

「婆さんは少時たつた後、ばつたり其處へ倒れました。が、ぢきに起き上つた時には、もう鬼使も去つたのでせう。唯きよきよするばかりだつたのです。鬼に憑かれる、——それは珍しい事でもありません。が、婆さんに乗り移つた鬼は、一家の男女の間を受けると、こんな幽冥の事も話したさうです。

「問。——秦檜は一體どうなりましたか？ 御差支なければ御教へ下さい。

「答。——秦檜も今は輪廻の果に、金華の女に生れてゐる。それが今度大膽にも、謀夫の罪を犯したから、磔の刑に處せられたのだ。

「問。——しかし秦檜は宋の人ではありませんか？ 金元明の三朝を閲した後、やつと罪を正されると云ふのは、遅過ぎるやうに思ひますが。

「答。——檜賊は、恣に和議を唱へ、妄に忠良を屠戮した。兇惡も亦甚しい。天曹はその罪を憎む餘り、磔刑三十六度、斬首の刑三十二度の判決を與へた。合計六十八度の刑は、さう手輕にすむものではない。

「まあ、かう云ふ調子なのです。秦檜の罪は憎むべしとは云へ、氣の毒なものではありませんか？」

嚴曉蒼は嚴瀨庭先生の曾孫である。決して譴をつくやうな人ではない。

九 西湖 (四)

岳王廟に詣でた後、我我は又畫舫を浮かべながら、孤山の東岸へ返つて來た。其處には槐や梧桐の蔭に、樓外樓の旗を出した飯館がある。「讀賣新聞」に出た紀行によると、武林無想庵氏の新夫妻は、この樓外樓で食事をしたらしい。我我も船頭の勧め通り、この店の前の槐の下に、支那の晝飯を食ふ事にした。が、私の前に坐つてゐるのは、押川春浪の

冒險小説を愛讀した結果、中學時代に家を抜け出して、何とかと云ふ軍艦の給仕になつて、八月十日の旅順の海戦に、砲火の下をくぐつて來たとか云ふ、蠻骨稜稜とした村田君である。私は料理を待ちながら、村田君には内證だつたが、ひそかに無想庵氏を羨望した。

我我の卓子は前にも云つた通り、枝をさし交した槐の下にある。前にはちき足もとに、西湖の水が光つてゐる。その水が絶えずゆらめいては、岸を塞いだ石の間に、音を立ててゐるのも物優しい。水際には青服の支那人が三人、一人は毛を抜いた鶏を洗ひ、一人は古布子の洗濯をし、一人はやや離れた柳の根がたに、悠悠と釣竿をかまへてゐる。と思ふところの男は、急に釣竿を高くあげた。綸の先には鮒が一匹、びんびん空中に跳ね返つてゐる。——かう云ふ光景は春光の中に、頗長閑な感じを興へた。しかも彼等の向うには、縹渺と西湖が開いてゐる。私は確に一瞬間、赤煉瓦を忘れ、ヤンキイを忘れ、この平和な眼前の景色に、小説めいた氣もちも起す事が出來た。——石礪村の柳の梢には、晩春の日影が當つてゐる。阮小二はその根がたに坐つた儘、さつきから魚釣りに餘念がない。阮小五

は鶏を洗つてしまふと、庖丁をとりて家の中へはいつた。「鬢には石榴の花を挿し、胸には青き豹を刺し」た、あの愛すべき阮小七は、未だ古布子を洗つてゐる。其處へのそのそ歩み寄つたのは、——

智多星吳用でも何でもない。大きい籃を腕にかけた、甚散文的な駄菓子賣である。彼は我我の側へ來ると、キヤラメルか何か買つてくれると云ふ。かうなつてはもうおしまひである。私は水滸傳の世界から、蛋のやうに躍り出した。天罡地煞百八人の中にも、キヤラメルを賣る豪傑は一人もゐない。のみならず今は湖水の上にも、まつ白に塗つたポオトが一艘、四五人の女學生に漕がれながら、湖心亭の方へ進んでゐる！

十分の後、我我は老酒を啜つたり、生姜煮の鯉を突ついたりしてゐた。すると其處へ又畫舫が一艘、槐の蔭に横づけになつた。岸へ登つた客を見れば、男が一人、女が三人、男女いづれとも判然しない、小さい赤ん坊が一人である。女の一人は身なりを見ると、乳母か下女の類らしい。男は金縁の眼鏡をかけた、如何にも不思議な因縁だが、無想庵氏に似

た大男である。跡に残つた二人の女は、きつと姉妹に違ひない。それが二人共同じやうに桃色と藍と縞になつた、セル地の衣裳を一着してゐる。器量も昨夜見た少女よりは、少くとも二割方美しい。私は箸を動かしながら、時々彼等へ眼をやつた。彼等は隣の卓子に、料理の來るのを待つてゐる。その中でも二人の姉妹だけは、何かひそひそ話しながら、我へ流眇を送つたりした。尤もこれは嚴密に云ふと、食事私の私を映すとか云つて、村田君がカメラをいぢつてゐる——其處が御目にとまつたのだから、餘り自慢にもならないかも知れない。

「君、あの姉さんの方は細君だらうか？」

「細君さ。」

「僕にはどうもわからない。支那の女は三十を越さない限り、どれも皆御嬢さんに見える。」

そんな話をしてゐる内に、彼等も食事にとりかかつた。青青と枝垂れた槐の下に、こ

のハイカラな支那人の家族が、文字通り嬉嬉と飯を食ふ所は、見てゐるだけでも面白い。私は葉巻へ火をつけながら、飽かず彼等を眺めてゐた。斷橋、孤山、雷峰塔、——それ等の美を談ずる事は、蘇峰先生に一任しても好い。私には明媚な山水よりも、やはり人間を見てゐる方が、どの位愉快だか知れないのである。

しかし何時までも彼等の食事に、敬意を拂つてゐる訣にも行かない。我我は勘定を拂つた後、三潭の印月へ出かける爲に、早速畫舫の客になつた。三潭の印月は孤山から見ると、丁度向う岸に近い島のほとりにある。島の名は何と云ふのだから、これは西湖全圖にも池田氏の案内記にも記してない。唯この島の近所には、東坡が杭州の守だつた時、みをつくしの爲に建てたと云ふ、石塔が三つ残つてゐる。その石塔が月明の夜には、水面に三つの影を落す、——と云ふ事だけは確である。舟は可也長い間、静かな湖水を漕ぎ續けてから、やつと柳と蘆との深い、退省庵前の棧橋に着いた。

十 西湖 (五)

棧橋を上ると門がある。門の中には水の澄んだ池に、支那の八つ橋がかかつてゐる。餘樓の廊が曲曲廊なら、これは曲曲橋だと評しても好い。その橋の處處に、氣の利いた亭が出来てゐる。それを向うへ渡り切ると、眩い西湖の水の上に、三つの石塔のあるのが見えた。梵字を刻んだ丸石に、笠を着せた石塔だから、石燈籠と大した違ひはない。我我は其處の亭の中に、この石塔を眺めながら、支那の巻煙草を二本吸つた。それから、——露西亞のソヴィエツト政府の話はしたが、蘇東坡の話はしなかつたやうである。

八つ橋をもとへ渡つて來ると、若い四五人の支那人に遇つた。彼等は皆めかした上に、胡弓や笛を携へてゐる。何でも長安の公子とか號したのは、かう云ふ連中だつたのに違ひない。水色や緑の太掛兒、指環にきらめいたいろいろの寶石、——私は彼等とすれ違ひながら、一一その容子を物色した。すると最後に通りすがつた男は、殆小宮豊隆氏と、寸

分も違はない顔をしてゐた。その後京漢鐵道の列車ボイにも、宇野浩二にそつくりの男がゐたし、北京の芝居の出方にも、南部修太郎に似た男がゐる所を見ると、一體日本の文學者には、支那人に似たのが多いのかも知れない。しかしこの時はまだ始めだつたから、他人の空似とは云ふものの、きつと小宮氏の先祖の一人は——なぞと、失禮な事も想像した。

——こんな事を書いてゐると、至極天下泰平だが、私は現在床の上に、八度六分の熱を出してゐる。頭も勿論ふらふらすれば、喉も痛んで仕方がない。が、私の枕もとには、二通の電報がひろげてある。文面はどちらも大差はない。要するに原稿の催促である。醫者は安靜に寝てゐると云ふ。友だちは壯だなぞと冷かしもする。しかし前後の行きがかり上、愈高熱にでもならない限り、兎に角紀行を續けなければならぬ。以下何回かの江南遊記は、かう云ふ事情の下に書かれるのである。芥川龍之介と云ひさへすれば、閑人のやうに思つてゐる讀者は、速に謬見を改めるが好い。——

我我退省庵を一見した後、さつきの棧橋へ歸つて來た。棧橋には支那人の爺さんが一人、魚籃を前に坐りながら、畫舫の船頭と話してゐる。その魚籃を覗いて見たら、蛇がいはひつてゐた。聞けば日本の放し龜同様、この爺さんは錢を貰ふと、一匹づつ蛇を放すのだと云ふ。如何に功德になると云つても、わざわざ蛇を逃がす爲に、金を出す日本人は一人もゐない。

畫舫は又我我を乗せると、島の岸に沿ひながら、雷峰塔の方へ進んで行つた。岸には蘆の茂つた中に、河柳が何本も戦いでゐる。その水面へ這つた枝に、何か蠢いてゐると思つたら、それは皆大きい泥龜だつた。いや、龜ばかりならば驚きはしない。ちよいと上の枝の股には、代赭色に脂切つた蛇が一匹、半身は柳に巻ついたなり、半身は空中にのたくつてゐる。私は背中が痒いやうな氣がした。勿論さう云ふ心もちは、愉快なものでも何でもない。

その内に島の角を繞ると、水を隔てた新緑の岸には、突兀と雷峰塔の姿が見えた。まづ

目前に仰いだ感じは、花屋敷の近處に佇んだ儘、十二階に對したのと選ぶ所はない。唯この塔は赤煉瓦の壁へ、一面に蔦蘿をからませたばかりか、雜木なぞも頂には靡かせてゐる。それが日の光に煙りながら、幻のやうに聳え立つた所は何と云つても雄大である。赤煉瓦もかうなれば不足はない。赤煉瓦と云へば案内記には、何故に雷峰塔は赤煉瓦であるか、——その理由を説明した、尤らしい話が載せてある。但しこの案内記は、池田氏の著した本ではない。新新旅館に賣つてゐた、英文の西湖案内記である。私はそれを書いた後、ペンを捨てるつもりだつたが、かう頭がふらついては、到底もう一枚と書く勇氣はない。跡は又明日でも、——いや、さう云ふ斷りを書くのも面倒である。肺炎にでもなられた日には、助からない。

十一 西湖 (六)

その案内記 Hanchow Itineraries によると、今を距る三百七十年餘りの昔、この西

湖のほとりには、屢倭寇が攻めこんで来た。處が彼等海賊には、雷峰塔が邪魔になつて仕方がない。何故かと云ふと支那の官憲は、塔上に物見を立たせてある。だから倭寇の一進一退は、杭州城へ近かない内に、ちやんと支那側に知られてしまふ。そこで或時日本の海賊は、雷峰塔のまはりに火を放つて、三日三晩焼き打ちを續けた。かかるが故に雷峰塔は、赤煉瓦の製造が始まらない以前、早くも赤煉瓦の塔に變つたのである。——ざつとかう云ふ次第だが、眞偽は勿論保證しない。

雷峰塔を少時仰いだ後、我我は新新旅館の方へ、——今日は昨日よりも熱が低い。喉も焼いたのが利いたやうである。この分ならば二三日中に、机の前へ坐れるかも知れない。しかし紀行を續ける事は、依然として厄介な心もちがする。その心もちを押して書くのだから、どうせ碌な物は出来さうもない。まあ、一日に一回だけ、纏りがつけば本望である。そこでもう一度繰り返すが、——雷峰塔を少時仰いだ後、我我は新新旅館の方に、徐に畫舫をめぐらせた。

西湖は今我我の前に、東岸一帯を開いてゐる。向うに、——新新旅館の上に、緑をなすつた石山は、葛洪煉丹の地だとか云ふ、評判の高い葛嶺であらう。葛嶺の頂には廟が一つ、丁度飛び立たうとする小鳥のやうに、軒先の鶯を反らせてゐる。その右に續いた山、——西湖全圖によると寶石山には、華奢な保俶塔の姿も見える。この塔が細細と突き立つた容子は、老衲の如き雷峰塔に比すると、正に古人の云つた通り、美人の如きものがあるかも知れない。しかも葛嶺は疊つてゐるが、寶石山の山頂の草には、鮮かに日の光が流れてゐる。これらの山山の裾あたりには、我我の泊つたホテルを始め、赤煉瓦の建物もないではない。が、いづれも遠いせむか、格別目に立たないのは幸福である。唯山山のなだれの所に、白い一線の連つてゐるのは、今朝通つた白堤に違ひない。白堤が左に盡きた所には、樓外樓の旗こそ見えないにせよ、新緑の孤山が横はつてゐる。かう云ふ景色は何と云つても、美しい事だけは否み難い。殊に今は點點と菱の葉を浮べた水の面も、底の淺いのを瞞着すべく、鈍い銀色に輝いてゐる。

「今度は何處に行くのです？」

「放鶴亭に行つて見ませう。林和靖のゐる所だから。」

「放鶴亭と云ふと？」

「孤山ですよ。新新旅館のすぐ前の所——」

その放鶴亭に上陸したのは、二十分餘り後の事だつた。畫舫は今度も其處へ來るのには錦帶橋をくぐつた上、すつと白堤に圍はれた、所謂裡湖を横つたのである。我我は梅の青葉の中に、放鶴亭を見物したり、もう一つ上に側立つた、これも林逋の巢居閣へ行つたり、その又後に立てられた、やはり大きい土饅頭の「宋林處士墓」なるものを見たり、いろいろその邊をうろつき廻つた。林逋は高人だつたのに違ひない。が、同時に又日本の小説家程、貧乏もしてゐなかつたのに違ひない。林逋七世の孫、洪の著した「山家清事」によると、洪の隱遁生活は「舍三寢一讀書一治藥一。後舍二一儲酒穀列農具山具一安僕役庖廡稱是。童一婢一園丁二犬十二足驢四蹄牛四角」だつたと云ふ。和靖先生も似たやうなものだと

すれば、月五十圓の借家にあるより、餘程豊たつたと云はなければならぬ。私にしても箱根あたりへ、母屋が一軒に物置が一軒——書齋、寢室、女中部屋等、すつかり揃つたのを建てて貰つた上、書生一人、女中一人、下男二人使つて好ければ、林處士の眞似などはむづかしくもない。水邊の梅花に鶴を舞はせるのも、鶴さへ承知すれば訣無しである。しかし私はさうなつても、「犬十二足驢四蹄牛四角」は使ひ途がない。これはそつくり君に上げるから、どうとも勝手にしてくれ給へ。——私は放鶴亭一見をすませた後、岸の畫舫へ歸りながら、こんな理窟を發表した。岸には柳絮の飛び交ふ間に、白の着物へ黒のスカートをはいた、支那の女學生が二三十人、ぞろぞろ西冷橋の方へ歩いてゐる。

十二 靈隱寺

私は薄汚い新新旅館の二階に、何枚かの畫はがきを認めてゐる。村田君はもう寢てしまつた。暗い窓硝子の一角には、不思議な位鮮かに、一匹の守宮がひつ附いてゐる。それ

を見るのが嫌だから、私は全然わき見をしず、ずんずん萬年筆を走らせ続ける。……

豊島與志雄に。

今日靈隠寺に出かける途中、清澗寺と云ふ寺を覗いたら、大きい長方形の池の中に、眞鯉、緋鯉が澤山ゐた。此處は玉泉魚躍とか號して、五色の鯉に名高い寺だと云ふ。尤も五色と云つた所が、實際は精精三色しかない。池に臨んだ亭の中には、籐椅子や卓子が並べてある。其處に腰をかけてゐると、坊主が茶や菓子を持つて來てくれる。くれると云つても唯ぢやない。つまり坊主は鯉を養つてゐるやうだが、實は鯉に養はれてゐるのだらう。君は染井の釣堀に、夜通し糸を垂れる豪傑だから、この寺の鯉も見さへすれば、釣りたくなるのに違ひない。

小穴隆一に。

靈隠寺に詣る。途中小石橋あり。橋下の水佩環を鳴らすが如し。兩岸皆幽竹。雨を帯ぶるの翠色、殆ど人に媚ぶるに似たり。石谷の畫境に近きもの乎。僕大いに詩興を催す。然

れども旅囊「圓機活法」なし。畢に一詩なき所以。ない方が仕合せかも知れない。

香取秀眞氏に。

靈隠寺は中中大きい寺です。總門をはいつて少し行つた所に、天竺の靈鷲山が飛んで來たと云ふ、飛來峯と號する山があります。(實は山と云ふよりも、大岩と云ふ方が好いのです)其處の石窟にある佛は、宋元の佛だと云ふ事です。が、僕にはどの佛も、好いのか悪いのだからわかりません。難有いと思つたのはたつた一つです。尤も石窟の一部分は、連日の雨に水が出てゐましたから、中へはひらずにしまひました。今日も時時雨が來ます。高い杉檜、苔の蒸した石橋、——まあ、この寺の大體の感じは、支那の高野山と思へばよろしい。

小杉未醒氏に。

靈隠寺を見ました。杉の幹に栗鼠の駈け上る所などは、如何にも山寺らしい閑寂なものです。雨天だつたせゐか、赭塗りの大雄寶殿なども、甚落着いた氣がしました。駱賓王

がゐたと云ふのは、傳説かも知れないが、一應尤らしい氣がします。此處の空氣には何となく、駱賓王じみた所がある。——あなたはさう思ひませんか？もう一つ次に申し上げたいのは、この寺の五百羅漢です。これも勿論御覽だつた事と思ひますが、少くとも二百位は、殆どあなたと瓜二つです。冗談でも何でも無い、實際あなたにそっくりです。聞けばこの五百羅漢の中には、マルコ・ポオロの像があるさうですが、まさかあなたの遠つ祖はマルコ・ポオロだつた次第でもないでせう。が、僕は萬里の異域に、あなたと相見する事が出来たやうな、愉快な心もちになりました。

佐佐木茂索に。

靈隱寺に詣りし歸途、鳳林寺一名喜鵲寺を訪ふ。烏巢禪師のゐた寺なり。寺は殆ど見るに足らず。唯葬ひか何かありしならん、鼠色の袈裟に海老茶の袈裟かけし坊主、何人も經を讀みながら、寺の廊下を歩みゐたり。白樂天、烏巢に問ふ。如何か佛法の大意。烏巢答へて曰、諸惡莫作、衆善奉行。樂天又云ふ。三尺の童子も之を知れり。烏巢笑つて曰、三

尺の童子も之を知れど、八十の老翁も行ひ難し。樂天即ち服すと。かう手軽く服された日には、烏巢禪師も氣味が悪かつたらう。寺門の前に支那の子供大勢あり。剪綵の花を持つて遊ぶ。雨後夕陽愛すべし。

手紙を書いてしまつたら、幸ひ守宮も見えなくなつてゐた。明日は杭州を去る豫定である。湧金門。回回堂。——そんな物を見る暇はないかも知れない。私は多少の寂しさを感じながら、シャツ一枚になつた後、ベッドの毛布へもぐりこもつとした。が、思はず飛びのきながら、「こん畜生」と大きい聲を出した。白いベッドの枕の上には、碁石程の蜘蛛がぢつとしてゐる！これだけでも西湖は碌な所ぢやない。

十三 蘇州城内 (上)

驢馬は私を乗せるが早いか、一目散に駈け出した。場所は蘇州の城内である。狭い往來の兩側には、例の通り招牌が下つてゐる。それだけでも好い加減せせこましい所へ、驢馬

も通る、轎子も通る、人通りも勿論少くはない、——と云ふ次第だつたから、私は手綱を引張つたなり、一時は思はず眼をつぶつた。これは臆病でも何でもなし。あの驢馬に跨つた儘、支那の敷石道を駈けて行くのは、容易ならぬ冒険である。その危なさを経験しない讀者は、罰金をとられるのは覺悟の上、東京ならば淺草の仲店、大阪ならば心齋橋通りへ、全速力の自轉車を驅つて見るが好い。

私は島津四十起氏と、今し方蘇州へ来たばかりである。本来ならば午前中に、上海を立つつもりだつたが、つい朝寝坊をしたものだから、豫定の汽車に間に合はなかつた。——それも一汽車乗り遅れたのぢやない。都合三列車乗り遅れたのである。其處へ島田太堂先生などは、その度に停車場へ來られたと云ふのだから、今思ひ出しても恥ぢ入らざるを得ない。しかも私を送る爲に、七絶を一首頂いた事は、愈恐縮すべき思ひ出である。

……私の前には意氣揚揚と、島津氏が驢馬を走らせてゐる。尤も島津氏は私のやうに、始め

て驢馬に乗つたのぢやない。だから腰の据り方が違ふ。私は島津氏を御手本に、内心は何度も冷や冷やしながら、いろいろ馬術の工夫をした。但しその後落馬したのは、正に御弟子の私ぢやない。御師匠番の島津氏自身である。

狭い往來の左右には、——實は最初の何分かは、何があるのか見えなかつた。が、その何分かが過ぎた後には、經師屋と寶石屋とが何軒もあつた。經師屋の店には山水だの花鳥だの、表装中の畫が並べてある。寶石屋の店には、翡翠や玉が銀の飾りなぞときらめいてゐる。それがどちらも姑蘇城らしい、優美な心もちを起させた。しかしあの優美な心もちも驢馬の背中に躍つてゐないと、もつと嬉しかつたのに相違ない。實際一度などは縫箔屋の店に、牡丹だの麒麟だのを縫ひとつた、紅い布が壁に吊してある、——それを見ようと思つたら、もう少しで目くらの胡弓弾きと、衝突してしまふ所だつた。

しかし驢馬を走らせるのも、平な敷石の上ならば、まだしも我慢が出来ない事はない。それが橋を渡るとなると、いづれも例の反り橋だから、上りは尻餅をつきさうになるし、

下りも運が悪ければ、驢馬の頭越しにすり落ちかねない。おまけに橋の多い事は、姑蘇三千六百橋、吳門三百九十橋の語が、文字通りほんたうでないにもせよ、滿更諛ばかりではなささうである。私はやむを得ず橋へかかると、手綱なぞを控へる代りに、驢馬の鞍へしがみついた。それでも橋を渡る時は、汚い白壁の並んだ間に、細細と蒼い運河の水が、光つてゐるのだけ眼にはいつた。

そんな道中を續けた後、やつと我我の辿りついたのは、北寺の塔の前である。聞けば蘇州七塔の中、登覽する事の出来るのは、僅にこの塔ばかりだと云ふ。塔の前の草原には、籃を携へた婆さんたちが、二三人摘草に耽つてゐる。この草原は案内記によると、昔の死刑場だと云ふ事だから、草も人血に肥えてゐるのかも知れない。しかし白壁に日の光を浴びた、九層の塔の聳える前に、青服の婆さんが三三五五、靜かに草を摘んでゐるのは、頗る悠悠とした眺めである。

我我は驢馬を飛び下りると、塔の最下層の入り口へ行つた。其處には支那の寺男が一人

格子戸の中に控へてゐる。それが二十錢の銀貨を貰つたら、大きい鏡を外した上、おはいりなさいと云ふ手眞似をした。塔の二階へ上る所には、埃臭い暗闇の中に、カンテラが一つもつてゐる。が、梯子を上りかけると、もうその光はさして來ない。その上手すりへつかまつたら、この塔へ詣でた善男善女何萬人かの手垢の名残が、べとり冷たいのには辟易した。しかし二階へ登つてしまへば、四方に口もついてゐるし、もう暗いのに困る事などはない。塔の内部は九層とも、皆桃色の壁の間に、金色の佛が安置してある。桃色と金と——かう云ふ色の配合は、妙に肉感的な所があるだけ、如何にも現代の南國らしい。私は何だかこの塔の上には、支那料理でもありさうな心もちがした。

十分の後、我我は塔の頂上から、蘇州の市街を見下してゐた。市街は黒い瓦屋根の間に鮮かな白壁を組みこんだなり、思つたより廣々と廣がつてゐる。その向うに霞を帯びた、高い塔があると思つたら、それは孫權が建てたとか云ふ、名高い瑞光寺の古塔だつた。(勿論今のは重修に重修を重ねた塔である。)町の外はどちらを向いても、水光りと緑との見え

ない所はない。私は欄干によりかかりながら、塔の下に草を食つてゐる、小さい二頭の驢馬を見下した。驢馬の側には驢馬引きの子供も、二人ながら石に腰かけてゐる。
 「おおうい。」
 私は大きい聲を出した。が、彼等はふり向きもしない。——高い塔上に立つてゐる事は、何だか寂しいものである。

十四 蘇州城内 (中)

我我は北寺の塔を見てから、玄妙觀を見物に行つた。玄妙觀はさつき通つた、寶石屋の多い往來から、ちよいと横町をはいつた所にある。觀前の廣場に露店の多い事は、上海の城隍廟と違ひはない。うどん、饅頭、甘蔗の莖、地栗——さう云ふ食物店の間には、玩具屋や雜貨屋も店を出してゐる。人出も勿論非常に多い。が、上海と違ふ事は、これ程ぞろぞろ練つてゐる中に、殆洋服の見えない事である。のみならず場所も廣いせぬか、何

だか上海のやうに陽氣でない。華やかな靴下が並べてあつても、菲臭い湯氣が立つてゐても、いや、漆のやうに髪が光つた、若い女が二三人、鬚色や薄紫の着物の尻をわざと振るやうに歩いてゐても、何處か鄙びた寂しさがある。私は昔ビエル・ロテイが、淺草の觀音に詣でた時も、こんな氣がしたのに違ひないと思つた。

その群集の中を歩いて行つたら、突きあたりに大きい御堂があつた。これも大きい事は大きい、柱の赤塗りも剝けてゐれば、白壁も埃にまみれてゐる。その上參詣人もこの堂へは、たまに上つて來るばかりだから、一層荒廢した感じが強い。中へはひるとべた一面に、石版だの木版だの肉筆だの、いづれも安物の懸け軸が、惡どい色彩を連ねてゐる。と云つても書畫の奉納ぢやない。皆新しい賣物である。店番は何處にあるのかと思つたら、薄暗い堂の片隅に、小さい爺さんが坐つてゐた。しかしこの懸け物の外には、香花は勿論尊像も見えない。

堂を後へ通り抜けると、今度は其處の人だかりの中に、兩肌脱ぎの男が二人、兩刀と槍

との試合をしてゐた。まさか刃はついてもゐるまいが、赤い房のついた槍や、鉤なりに先の曲つた刀が、きらきら日の光を反射しながら、火花を散らして切り結ぶ所は、頗見事なものである。その内に辯子のある大男は、相手に槍を打ち落されると、隙間もない太刀先を躲し躲し、咄嗟に相手の脾腹を蹴上げた。相手は兩刀を握つた儘、仰向けさまにひつくり返る、——と、まはりの見物は、嬉しさうにとつと笑ひ聲をあげた。何でも病大蟲藤永とか、打虎將李忠とか云ふ豪傑は、こんな連中だつたのに相違ない。私は堂の石段の上へ、彼等の立ち廻りを眺めながら、大いに水滸傳らしい心もちになつた。

水滸傳らしい——と云つただけでは、十分に意味が通じないかも知れない。一體水滸傳と云ふ小説は、日本にも馬琴の八犬傳を始め、神稻水滸傳とか本朝水滸傳とか、いろいろ類作が現れてゐる。が、水滸傳らしい心もちは、そのいづれにも寫されてゐない。ぢや「水滸傳らしい」とは何かと云へば、或支那思想の閃きである。天罡地煞一百八人の豪傑は、馬琴などの考へてゐたやうに、忠臣義士の一團ぢやない。寧數の上から云へば、無

頼漢の結社である。しかし彼等を糾合した力は、悪を愛する心ぢやない。確武松の言葉だつたと思ふが、豪傑の士の愛するものは、放火殺人だと云ふのである。が、これは嚴密に云へば、放火殺人を愛すべくんば、豪傑たるべしと云ふのである。いや、もう一層丁寧に云へば、既に豪傑の士たる以上、區區たる放火殺人の如きは、問題にならぬと云ふのである。つまり彼等の間には、善悪を脚下に蹂躪すべき、豪傑の意識が流れてゐる、模範的軍人たる林冲も、専門的博徒たる白勝も、この心を持つてゐる限り、正に兄弟だつたと云つても好い。この心——云はば一種の超道徳思想は、獨り彼等の心ばかりぢやない。古往今來支那人の胸には、少くとも日本人に比べると、遙に深い根を張つた、等閑に出来ない心である。天下は一人の天下にあらずと云ふが、さう云ふ事を云ふ連中は、唯昏君一人の天下にあらずと云ふのに過ぎない。實は皆肚の中では、昏君一人の天下の代りに彼等即ち豪傑一人の天下にしようと思ふのである。もう一つその證據を挙げれば、英雄頭を回らせば、即ち神仙と云ふ言葉がある。神仙は勿論悪人でもなければ、同時に又善人でもない。善悪の

彼岸に棚引いた、霞ばかり食ふ人間である。放火殺人を意としない豪傑は、確にこの點では一回頭すると、神仙の仲間にはいつてしまふ。もし諷だと思ふ人は、試みにニイチエを開いて見るが好い。毒藥を用ゐるツアラトストラは、即ちシイザア・ボルデアである。水滸傳は武松が虎を殺したり、李逵が鐵を振廻したり、燕青が相撲をとつたりするから、萬人に愛讀されるんぢやない。あの中に磅礴した、圖太い豪傑の心もちが、直に讀む者を酔はしめるのである。……………

私は又武器の音に目を見張つた。あの二人の豪傑は、私が水滸傳を考へてゐる内に、何時か一人は青龍刀を、一人は幅の廣い刀をふり上げながら、二度目の切り合ひを始めてゐる。

十五 蘇州城内 (下)

孔子廟へ來たのは日暮れ方だつた。疲れた驢馬に跨りながら、敷石の間に草の生えた。

廟前の路へさしかかると、寂しい路ばたの桑畑の上に、薄白い瑞光寺の廢塔が見える。塔の一層一層に、蔦蘿や草の茂つたのも見える。その空に點點と飛び違ふ、この邊に多い鶺鴒も見える。私は實際この瞬間、蒼茫萬古の意でも形容したい、哀れにも嬉しい心もちになつた。

この蒼茫萬古の意は、幸ひにすつと裏切られなかつた。門外に驢馬を乗り捨てた後、路も覺束ない草の中を行けば、暗い柏や杉の間に、南京藻の浮んだ池がある。と思ふと池の縁には、赤い筋の帽子の兵卒が一人、蘆や蒲を押し分けながら、又手網に魚を掬つてゐる。此處は明治七年に再建されたとは云ふものの、宋の名臣范仲淹が創めた、江南第一の文廟である。それを思へばこの荒廢は、直に支那の荒廢ではないか？ しかし少くとも遠來の私には、この荒廢があればこそ、懷古の詩興も生ずるである。私は一體歎けば好いのか、それとも又喜べば好いのか？——さう云ふ矛盾を感じながら、苔蒸した石橋を渡つた時、私の口には何時の間にか、こんな句がかすかに謳はれてゐた。「休言竟是人家國。我亦書生

好感時。——但しこの句の作者は私ぢやない。北京にゐる今關天彭氏である。
 黒い禮門を通り過ぎてから、石獅の間を少し歩むと、何とか云ふ小さい通用門がある。
 その門を開けて貰ふ爲には、青服の門番の上さんに、二十錢銀貨をやらなければならない。
 が、その貧しさうな上さんが、痘痕のある十ばかりの女の子と一しよに、案内に立つ所は
 哀れである。我我は彼等の後から、毒だみの花だけ灰白い、夕濕りの敷石を踏んで行つた。
 敷石の盡きる所には、戟門と云ふのだらう、大きい門が聳えてゐる。名高い天文圖や支那
 全圖の石に刻まれたのも此處にあるが、あたりに漂つた薄明りでは、碑面もはつきりとは
 見る事が出来ない。唯その門をはいつた所に、太鼓や鐘が並んでゐる。甚しいかな、禮樂
 の衰へたるや。——今考へると滑稽だが、私はこの埃だらけの、古風な樂器を眺めた時、
 何だかそんな感慨があつた。
 戟門の中の石疊みにも、勿論茫茫と草が伸びてゐる。石疊みの兩側には、昔の文官試験
 場だつたと云ふ、廊下同様の屋根續きの前に、何本も太い銀杏がある。我我は門番の親子

と一しよに、その石疊みのつきあたりにある、大成殿の石段を登つた。大成殿は廟の成殿
 だから、規模も中雄大である。石段の龍、黄色の壁、群青に白く殿名を書いた、御筆ら
 しい正面の額——私は殿外を眺めまはした後、薄暗い殿内を覗いて見た。すると高い天井
 に、雨でも降るのかと思ふ位、颯颯たる音が渡つてゐる。同時に何か異様の臭ひが、ぶん
 と私の鼻を打つた。
 「何です、あれは？」
 私は早速退却しながら、島津四十起氏をふり返つた。
 「蝙蝠ですよ、この天井に巢を食つてゐる。——」
 島津氏はにやにや笑つてゐた。見れば成程敷き瓦の上にも、一面に黒い糞が落ちてゐる。
 あの羽音を聞いた上、この夥しい糞を見れば、如何に澤山の蝙蝠が、梁間の暗闇に飛ん
 であるか、想ふだに餘り好い氣味はしない。私は懐古の詩境からゴヤの畫境へつき落され
 た。かうなつては蒼茫どころぢやない。宛然たる怪談の世界である。

「孔子も蝙蝠には閉口でせう。」
 「何、蝠と福とは同音ですから、支那人は蝙蝠を喜ぶものです。」
 驢背の客となつた後、我我はもう夕靄の下りた、暗い小道を通りながら、こんな事を話し合つた。蝙蝠は日本でも江戸時代には、氣味が悪いと云ふよりも、意氣な物だと思はれたらしい。蝙蝠安の刺青の如きは、確にその證據である。しかし西洋の影響は、何時の間にか鹽酸のやうに、地金の江戸を腐らせてしまつた。して見れば今後二十年もすると、「蝙蝠も出て来て演の夕涼み」の唄には、ポオドレルの感化があるなぞと、述べ立てる批評家が出るかも知れない。——驢馬はその間も小走りに、頸の鈴を鳴らし鳴らし、新緑の匂の漂つた、人氣のない路を急いでゐる。

十六 天平と靈巖と (上)

天平山白雲寺へ行つて見たら、山に倚つた亭の壁に、排日の落書きが澤山あつた。「諸君

備在快活之時、不可忘了三七二十一條」と云ふのがある。「犬與日奴不得題壁」と云ふのがある。(尤も島津氏は平然と、層雲派の俳句を題してゐた。)更に猛烈なやつになると、「莽蕩河山起暮愁。何來不共戴天仇。恨無十萬橫磨劍。殺盡倭奴方罷休。」と云ふ名詩がある。何でもこの詩の前書きには、天平山へ詣る途中、日本人と喧嘩をしたら、多勢に無勢のため負けてしまつた。痛憤に堪へないなどと書いてあつた。聞けば排日の使喚費は、三十萬圓内外とか云ふ事だが、この位利き目があるとするれば、日本の商品を驅逐する上にも、寧ろ安い廣告費である。私は欄外の若楓の枝が、雨氣に垂れたのを眺めながら、若い寺男の持つて来る、抹香臭い茶を飲んだり、固い棗の實を嚙つたりした。
 「天平山は思つたより好い。もう少し綺麗にしてあると猶好いが、——おや、あの山の下堂の障子は、あれは硝子が嵌まつてゐるのですか？」
 「いや、貝ですよ。木連れ格子の目へ一枚づつ、何とか云ふ貝の薄いやつを、硝子代りに貼りつけたのです。——天平山は何時か谷崎さんも、書いてゐたぢやありませんか？」

「ええ、蘇州紀行の中に。——尤も天平山の紅葉よりは、途中の運河の方が面白かつたやうです。」

我我は靈巖山へも登る必要上、今日も驢馬に跨つて来たが、それでも初夏の運河に沿うた、姑蘇城外の田舎路は、美しかつたのに相違ない。白い鷺の浮いた運河には、やはり太鼓なりに反り上つた、古い石橋がかかつてゐる。その水にはつきり影を落した、涼しい路ばたの槐や柳、或は青麥の畠の間に、紅い花をつけた玫瑰の棚、——さう云ふ風景の處に、白壁の農家が何軒も見える。殊に風流に思つたのは、そんな農家を通り過ぎる毎に窓の中を覗きこむと、上さんだか娘だか、刺繍の針を動かしてゐる、若い女も少くない。生憎空は曇つてゐたが、もし晴れてゐたとすれば、彼等の窓の向うには、靈巖、天平の青山が、描いたやうに見えた事であらう。……………

「谷崎さんも乞食に惱まされたやうですね。」

「あれには誰でも惱まされる。——しかし蘇州の乞食はまだ好いですよ。杭州の靈巖寺と

来た日には。——」

私は思はず笑ひ出した。靈巖寺の乞食の非凡さは、日本人には到底想像も出来ない。大袈裟にぼんぼん胸を叩いたり、地びたへ頭を續け打ちにしたり、足首のない足をさし上げて見せたり、——まづ、乞食の技巧としては、最も進歩した所を見せる。が、我我日本人の眼には、聊薬が利きすぎるから、憐憫の情を催すよりも、餘り仰仰しいのに吹き出ししてしまう。あれを思へば蘇州の乞食は、唯泣き聲を出すだけだから、手の内をやるにもやり心地が好い。しかし獅子山の裾か何かの、寂しい村を通つた時、うっかり一錢投げてやつたばかりに、村の子供達の女だのが、いづれも手をさし出しながら、驢馬のまはりを取り巻いたのは、少からず難澁した。如何に柳が垂れてゐたり、女が刺繍をしてゐたりしても、敬服ばかりすべきものぢやない。その村の白壁の一重内には、丁度巢を食つた燕のやうに、恐るべき娑婆苦が潜んでゐる。……………

「ぢや山の上に登つて見ませうか？」

島津氏は私を促しながら、亭後の山路を登り始めた。油ぎつた若葉の中に、土の赤い山路が、細細と岩を縫つてゐるのは、何だか嬉しものである。その路を斜に登りつめると、今度は屏風を立てたやうに、巨岩の突き立つた所へ出た。此處が行き止りかと思つたら、岩と岩との迫つた間に、體を横にしなければ、殆ど通過も出来ない位、小さい路が走つてゐる。いや、走つてゐるのぢやない。まつ直に天上へ向つてゐるのである。私は岩の下に佇んだ儘、樹の枝や蔦に絡られた、遠い青空を振り仰いだ。

「卓筆峰とか望湖臺とか云ふのはこの山の上にあるのでせうか？」

「さあ、多分さうでせう。」

「成程、これは登天平路らしい。」

十七 天平と靈巖と (中)

萬笏朝天の名を負うた、山頂の岩むらへ登つた後、又山路を下りて來ると、さつきの亭

へ出る前に、横に切れる廊下が見えた。次手に其處を曲つて見たら、龍の髯や擬寶珠に圍まれた、小さい池が一つある。——その池へ亞鉛の懸け桶から、たらたら水の落ちてゐるのが、名高い吳中第一泉だつた。池のまはりには白雲泉とか、魚樂とか、いろいろの名を彫りつけた上に、御丁寧にもベンキか何かさした、大小の碑が並んでゐる。あれは吳中第一泉にしては、餘り水が汚いから、唯の泥池と間違はれないやうに、廣告をしたのに違ひない。

しかしその池の前の、見山閣とか號するものは、支那の燈籠がぶら下つてゐたり、新しい絹の布團があつたり、半日位寝ころんでゐるには、誂へ向きらしい所だつた。おまけに窓に倚つて見れば、山藤の靡いた崖の腹に、すつと竹が群つてゐる。その又遙か山の下に、池の水が光つてゐるのは、乾隆帝が命名した、高義園の林泉であらう。更に上を覗いて見ると、今登つた山頂の一部が、かすかな霧を破つてゐる。私は窓によりかかりながら私自身南畫か何かの點景人物になつたやうに、ちよいと悠然たる態度を粧つて見た。

「天平地平、人心不平、人心平平、天下泰平。」
「何です、それは？」

「さつきの壁に書いてあつた、排日の落書きの一つですがね。中口調が好いちやありませんか？ 天平地平、人心不平、……」

天平山一見をすませた後、我我は又驢馬に乗りながら、靈巖山靈巖寺へ志した。靈巖山は傳説にもせよ。西施彈琴の岩もあれば、范蠡の幽閉された石室もある。西施や范蠡は幼少の時に、吳越軍談を愛讀した以來、未だ私の最良役者だから、是非さう云ふ古蹟を見て置きたい。——と云ふ心もちも勿論あつたが、實は社命を帯びてゐる以上、いざ紀行を書かされるとなると、英雄や美人に縁のある所は、一つでも餘計に見て置いた方が、萬事に好都合ぢやないかと云ふ、さもしい算段もあつたのである。この算段は上海から、江南一帯につき纏つた上、洞庭湖を渡つても離れなかつた。さもないれば私の旅行は、もつと支那人の生活に觸れた、漢詩や南畫の臭味のない、小説家向きのものになつたのである。

が、今は便便と道草なぞを食つてゐる場合ぢやない。——兎に角靈巖山へ志した。處が十町と來ない内に、何時か道がなく無つてしまつた。あたりには草の深い濕地に、背の低い雜木が茂つてゐる。可笑しいなと思つてゐると、驢馬を曳いて來た二人の子供も、其處に足を止めたぎり、何か不安さうに饒舌り出した。

「路が分らないのですか？」
私は島津氏に聲をかけた。島津氏は私の鼻のさきに、瘦せた驢馬を乗り据ゑた儘、大澤に陥つた項羽のやうに、あたりの景色を見廻してゐる。

「分らないのださうです。——おお、あすこに百姓がゐる。おい、モンモンケ！」
但しこのモンモンケなる言葉は、驢馬曳きの子供に發せられたのである。既に百姓がゐると云ふ以上、これはきつとその百姓に、路を問へと云ふ事に違ひない。私の推察にして誤らなければ、モンは問答の間である。——私はさう思つたから、私について來た驢馬曳きにも、早速同様の命令を下した。

「モンモンケ！ モンモンケ！」

モンモンケは秘密の呪文のやうに、忽ち路をわからせてくれた。驢馬曳きの復命した所によれば、右にまっ直に行きさへすれば、靈巖山の麓へ出るさうである。我我は早速教へられた方へ、驢馬の頭を向け直した。が、又一二町行つたと思ふと、本街道へ來るところか、寂しい谷合ひへはひつてしまつた。磊磊と横はつた石の間には細い松ばかり生え伸びてゐる。おまけに水でも出た跡か、その松の根こぎになつたのも見えれば、山腹の土の崩れてゐるのも見える。更に一層困つた事には、少時谷に沿うて登つて行つたら、とうとう驢馬が動かなくなつた。

「弱つたな。」

私は山を見上げながら、ため息をつかすにはゐられなかつた。

「何、かう云ふ事も面白いです。あの山がきつと靈巖山ですから、——さうです、兎に角あの山へ登つて見ませう。」

島津氏は私を勵ますやうに、わざとしか思はれない快活さを見せた。

「驢馬はどうするのです？」

「驢馬は此處に待たして置けばよろしい。」

島津氏は驢馬を飛び下りると、一人の子供と二頭の驢馬とを松の中に残した儘、猛然と山腹へ登り出した。勿論、登り出したと云つても、路なぞがついてゐる訣ぢやない、野薔薇や笹を押し分けながら、ひた押しに斜面を押し上るのである。私はもう一人の驢馬曳きと一しよに、負けずに島津氏の跡を追つた。が、病後の事だから、かうなるとさすがに息が切れる。その上十間ばかり登る内にぼつりと冷たい物が顔に落ちた。と思ふと一山の木木が、さあつとかすかに戦ぎ始める。雨——私は靴を濡らせないやうに、細い松の木にばかりながら、足もとの谷を見下した。谷の底には驢馬や子供が小さく雨に濡らされてゐる。

.....

十八 天平と靈巖と (下)

やつと靈巖山へ辿り着いて見たら、苦勞して來たのが莫迦莫迦しい程、佻しい禿げ山に過ぎなかつた。第一西施の彈琴臺とか、名高い館娃宮址とか云ふのは、裸の岩が散在した、草も緑にない山頂である。これでは如何に詩人がつても、到底わが李太白のやうに、「宮女如花滿春殿」などと、懷古の情には沈めさうもない。それに天氣でも好かつたなら、遙に太湖の水光か何か、見晴らす事が出來たのだが、生憎今日はどちらを見ても、唯模糊たる雲煙が、立ち迷つてゐるばかりである。私は靈巖寺の朽廊に、蕭蕭たる雨の音を聞きながら、七級の廢塔を仰ぎ見た時、古人の名句を思ふよりも、しみじみ腹の減つた事を感じた。我は寺の一室に、ビスケットばかりの書飯をすませた。が、一應腹は張つても、精力は更に恢復しない。私は埃臭い茶を飲みながら、妙に悲しい心もちがして來た。

「島津さん。この寺の坊主に掛け合つてくれませんか？ 白砂糖が少し欲しいのですが、

「白砂糖？ 白砂糖をどうするのです？」

「舐めるのです。白砂糖がなければ赤砂糖でもよろしい。」

しかし小皿へ山盛り一杯、どす黒い砂糖を舐めた後も、やはり元氣にはなれなかつた。雨は中中晴れさうもない。蘇州へは日本里數にしても、四五里の路を隔ててゐる。——そんな事を考へると、愈心もちが沈んでしまふ。私は何だか肋膜炎が、再發しさうな氣さへして來た。

この情ない心もちには、靈巖山を下る間にも、だんだん募つて來る一方だつた。風雨は暗い中空から、絶えず我我を襲つて來る。我我は傘を持つてゐたが、さつき驢馬を捨てる時に、二本とも其處に残して來た。路は勿論迂りさうである。時間は彼是三時過ぎになつた。——其處へ最後の打撃だつたのは、山の麓の村へ來ても、我我の驢馬の姿が見えない。驢馬曳きの子供は大聲に、何度も友だちの名を呼んだが、それこそ答へるのは欲だけであ

る。私は吹きかける雨の中に、すぶ濡れの島津氏へ聲をかけた。

「驢馬がゐないとすると、どうしたものでせう？」

「ゐますよ。ゐなければ歩くだけです。」

島津氏はやはり元氣だつた。それは私を慰める爲に、強て装つたものだつたかも知れない。が、私はその言葉を聞くと、急に痼癩が起り出した。元來痼癩と云ふものは、決して強者の起すものぢやない。この場合も私が腹を立てたのは、全然弱者だつた祟りである。四百餘州を縦横した島津氏と、自脈ばかりとつてゐる病後の私と、——困苦缺乏に耐へる上から見れば、私などは島津氏の足もとへもよれない。それだけに、平然たる島津氏の言葉は、私の怒火を吹き煽つたのである。私は前後四箇月の旅行中、この時だけ比類ない佛頂面になつた。

その内に驢馬曳きは驢馬を尋ねに、何處か村の外へ行つてしまふ。我我は或農家の戸口に、やつと雨を避けながら、驢馬曳きの歸るのを待ち暮してゐる。古い白壁、石だらけの

村道、雨に光つた道はたの桑の葉、——その外は殆ど人影さへ見えない。時計を出して見れば、四時になつてゐる。雨、四五里の路、肋膜炎、——私はなほこの上にも、日が暮れる事を惧れながら、風を引かない用心に、絶えず足踏みをする必要があつた。

すると其處へこの家の主人か、ぢぢむさい支那人が顔を出した。見れば家の内部には、轎子が一臺しまつてゐる。きつと此男の副業は、駕籠昇きか何かに違ひない。

「此處から轎子は雇へないのでですか？」

私は業腹なのを我慢しながら、かう島津氏に尋ねて見た。

「聞いて見ませう。」

しかし島津氏の上海語は、相手の支那人に通ずるにしても、残念ながら相手の蘇州語は十分島津氏に通じないらしい。島津氏は押問答を重ねた後、とうとう交渉を斷念した。斷念したのはやむを得ない。が、一瞬の後振り向いて見ると、島津氏は私に頓着なく、悠悠と手帳を擴げながら、今日得た俳句を書きつけてゐる。私はこの容子を眺めた時、羅馬の

大火を前にした儘、微笑してゐるネロを見たやうに、喧嘩を吹きかけなければすまない氣になつた。

「お互に迷惑しますね、案内者がその土地を知らないと。——」

喧嘩面の私の言葉は、忽ち島津氏にも腹を立てさせた。これは怒るのが當り前である。

私は今考へると、あの時島津氏に擲られなかつたのは、不幸中の幸と思はざるを得ない。

「その土地を知らない？ 知らない事は前にも申し上げた筈です。」

島津氏は私を睨みつけた。私も足踏みを續けながら、負けずに島津氏を睨み返した。

——これは次手に注意するが、かう云ふ時には威張るにしても、ちやんと直立して威張るべきである。威張る傍機械的に、行儀の好い足踏みを繰返してゐるのは、少からず威厳を傷けるらしい。

雨は依然として降りしきつてゐる。驢馬の鈴音は何時になつても、容易に聞えさうなけはひがしない。我我は寂しい桑畑の前に、二人とも血相を變へながら、ちつと長い間立ち

續けてゐた。

十九 寒山寺と虎邱と

客。蘇州はどうだつたね？

主人。蘇州は好い處だよ。僕に云はせれば江南第一だね。まだあすこは西湖のやうに、ヤンキイ趣味に染んでゐない。それだけでも難有い氣がした。

客。姑蘇城外の寒山寺は？

主人。寒山寺かい？ 寒山寺は、——誰でも支那へ行つた連中に聞いて見給へ。きつと皆下らんと云ふから。

客。君もかね？

主人。さうさね。下らんには違ひない。今の寒山寺は明治四十四年に、江蘇の巡撫程徳全が、重建したと云ふ事だか、本堂と云はず、鐘樓と云はず、悉紅鼓を塗り立てた、

俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち鳥啼くどころの騒ぎぢやない。おまけに寺のある所は、城の西一里ばかりの、楓橋鎮と云ふ支那町だがね。これが又何の特色もない、不潔を極めた門前町と來てゐる。

客。それぢや取り柄がないぢやないか。

主人。まあ、幾分でも取り柄のあるのは、その取り柄のない所だね。何故と云へば寒山寺は、一番日本人には馴染の深い寺だ。誰でも江南へ遊んだものは、必寒山寺へ見物に出かける。唐詩選を知らない連中でも、張繼の詩だけは知つてゐるからね。何でも程徳全が重修したのも、一つには日本人の参詣が多いから、日本に敬意を表する爲に、一肌脱いだのだと云ふ事だ。すると寒山寺を俗悪にしたのは、日本人にも責はあるかも知れない。

客。しかし日本人には氣に入らないのだらう？

主人。さうらしいね。が、程徳全の愚を晒ふ連中でも、西洋人相手の仕事になると、程徳全と同じ事をしてゐる。寒山寺はその實物教訓だね。其處に多少興味があるだらう？

殊にあの寺の坊さんは、日本人の顔さへ見ると、早速紙を展げては、「跨海萬里甲古寺惟爲鐘聲遠送君」と、得意さうに悪筆を振ふ。これは誰でも名を聞いた上、何何大人正とか何とか入れて、一枚一圓に賣らうと云ふのだ。日本人の旅客の面目は、こんな所にも窺はれるぢやないか？ まだその上に面白いのは、張繼の詩を刻んだ石碑が、あの寺には新舊二つある。古い碑の書き手は文徵明、新しい碑の書き手は俞曲園だが、この昔の石碑を見ると、散散に字が缺かれてゐる。これを缺いたのは誰だと云ふと、寒山寺を愛する日本人ださうだ。——まあ、ざつとこんな點では、寒山寺も一見の價値があるね。

客。それぢや國辱を拜見する訣ぢやないか？

主人。さうさね。事によると案外程徳全は、日本人を愚弄する爲に、あんな重修をやつたのかも知れない。たとひ皮肉でないにしても、あらゆる支那旅行記の著者のやうに、程徳全を晒ふのは残酷だね。敷島の和の知事閣下にしても、あの位の英斷に出づるの士は餘りなささうでもないぢやないか？

客。寶帯橋は？

主人。唯長い石橋さ。ちよいとあの不忍の池の觀月橋と云ふ感じだね。尤もあれ程俗な氣はしない。春風春水春草堤——道具立てはちやんと揃つてゐる。

客。虎邱は好い所だらう？

主人。虎邱も荒廢を極めてゐたつけ。あすこは吳王闔閭の墓ださうだが、今日では全然塵塚の山だね。傳説によればあの山の下には、金銀珠玉を細工をした鴨が、三千の寶劍としよに埋めてあると云ふ。そんな事だけ聞いてゐる方が、反つて興味が多い位だ。秦の始皇の試劍石、生公の説法を聞いた點頭石、江南の美人眞孃の墓、——いろいろ因縁を承ると、難有い遺蹟が澤山あるが、どれも見てもつまらん物だ。殊に劍池なぞと來た日には、池と云ふよりも水たまりだね。しかも五味捨て場も同じ始末なのだから、王禹の劍池銘にあるやうに、「巖巖虎邱、沈沈劍池、峻不可以仰視、深不可以下窺」の趣は、義理にもあると考へられない。唯殘曠を漲らした空に、やや傾いた塔を見上げた時は、悲壯に近い心も

ちがした。この塔もとうに朽廢してゐるから、一層毎に草を茂らせてゐる。それに何だか無数の鳥が、盛に啼き聲を飛ばせながら、塔のまはりを繞つてゐたのは、一段と嬉しかつたのに違ひない。僕はその時島津氏に、鳥の名前を尋ねて見たが、確かバクとか云ふ事だつた。バクとはどう云ふ字を書くのか、其處は島津氏も知らないのだがね。君はバクなるものを知らないかい？

客。バクかい？ バクなら夢を食ふ獸だがね。

主人。一體日本の文學者は、動植物の智識に乏しすぎるね。南部修太郎と云ふ男などは日比谷公園の蘆を見ても、麥だとばかり思つてゐたのだから。——まあ、そんな事はどうでも好い。塔の外にもう一つ、小吳軒と云ふ建物がある。其處は中見晴しが好い。暮色に煙つた白壁や新樹、その間を縫つた水路の光——僕はそんな物を眺めながら、遠い蛙の聲を聞いてゐると、かすかに旅愁を感じたものだ。

二十 蘇州の水

主人。寒山寺だの虎邱だのの外にも、蘇州には名高い庭がある。留園だとか、西園だとか。

客。それも皆つまらないのぢやないか？

主人。まあ、格別敬服もしないね。唯留園の廣いには、——園その物が廣いのぢやない、屋敷全體の廣いには、聊妙な心もちになつた。つまり白壁の八幡知らずだね。どちらへ行つても同じやうに、廊下や座敷が続いてゐた。庭も大抵同じやうに、竹だの芭蕉だの大湖石だの、似たやうな物があるばかりだから、愈迷子になりかねない。あんな屋敷へ誘拐された日には、ちよいと逃げる訣にも行かないだらう。

客。誰か誘拐されたのかい？

主人。何、された訣ぢやないが、どうもさう云ふ氣がするのだね。今に支那の谷崎潤一

郎は、きつと「留園の秘密」とか何とか、そんな名の小説を作るに違ひない。いや、未來は兎も角も、金瓶梅や紅樓夢を讀むには、現在一見の價値があるやうだ。

客。寒山寺、虎邱、寶帶樓、——いづれもつまらないとなつて見ると、蘇州は大抵つまらなささうぢやないか。

主人。そんな所はつまらないがね。蘇州はつまらない所ぢやない。蘇州にはヴェニスやうに、何よりもまづ水がある。蘇州の水、——さうさう、蘇州の水と云へば、僕は當時手帳の端に、こんな事も書いて置いたつけ、「自然と人生」式の名文だがね。

——橋名を知らず、石欄に倚りつつ河水を見る。日光。微風。水色鴨頭の縁に似たり。兩岸皆粉壁。水上の影描けるが如し。橋下を過ぐるの舟、まづ赤塗りの船首見え、次に竹を編みし船艙見ゆ。櫓聲の啾啾耳にあれど、船尾既に橋下を出づ。桂花一枝流れ来るあり。春愁水色と共に深からんとす。

——暮歸。蹇驢に騎す。路常に水畔。夜泊の船。皆蓬を蔽へるを見る。月明、水露、兩

岸粉壁の影、朦朧として水にあり。時に窓底の人語、燈光の赤きに伴ふを聞く。或は又石橋あり。偶橋上を過ぐるの人、胡弓を弄する事三兩聲。仰ぎ見ればその人既にあらず。唯橋欄の高きを見るのみ。景情宛として「聯芳樓の記」を想はしむ。知らず閩閩門外宮河の邊、珠簾重重月に垂るる事、薛家の粧樓の如きものありや否や。

——春雨霏霏、兩岸の粉壁、苔色鮮なるもの少からず。水上鷺浮ぶ事三四。橋畔の柳條、殆水に及ばんとす。晝とすれば或は套、實景を見るは悪しからず。舟あり。徐に橋下より來る。載する物を見れば棺なり。船中の一老嫗、線香に火をともしつつ、棺前に手向けんとするを見る。

客。へええ、大いに又感心したものでやないか？

主人。水路だけは實際美しい。日本にすれば松江だね。しかしあの白壁の影が、狭い川に落ちてゐる所は、松江でもちよいと見られさうもない。その癖末に情ない事には、とうとう畫舫にも乗らずにしまつた。しかし水には感服しただけ、兎に角未練は残つてゐない。

残念なのは美人を見なかつた事だ。

客。一人も見えない？

主人。一人も見えない。——何でも村田君の説によると、目をつぶつて搦んでも、蘇州の女ならば別嬪ださうだ。現に支那の藝者の言葉は、皆蘇州語ださうだから、その位の事はあるかも知れない。處が又島津氏の説では、一體蘇州の藝者なるものは、蘇州語に一通り通じた上、上海へ出ようと云ふ候補生か、又は上海へ出て流行らないので、歸つて來たと云ふ落伍卒だから、碌な女はゐないさうだ。成程これも一理篇だね。

客。それで見ずにしたつたのかい？

主人。何、別に理由などはない。唯藝者の顔を見るよりは、一時間も餘計に眠りたかつたのさ。何しろあの時分は驢馬へ乗つたおかげに、すっかり尻をすり削いてゐたから。——

客。意氣地のない男だね。

主人。我ながら意氣地があつたとは思へないよ。

二十一 客棧と酒棧

島津氏が何處かへ出て行つた後、私は椅子に腰を下しながら、ゆつくり一本の敷島を吸つた。寢臺が二つ、椅子が二つ、茶道具を載せた卓子が一つ、それから鏡のある洗面臺が一つ、——その外は窓掛も敷物もない。唯白いむき出しの壁に、ペンキ塗りの戸が鎖してある。が、思つたより不潔ぢやない。蚤とり粉を盛に撒いたせるか、幸南京蟲にも食はれなかつた。この分なら支那宿へ泊るのも、茶代の多寡を心配しながら日本人の旅館に陣取るよりは、遙に氣が利いて居る位である。——私はそんな事を考へながら、硝子窓の外へ眼をやつた。この部屋のあるのは三階だから、窓の外は眺も可也廣い。しかし眼にはひるものは、夕明りの中に黒み渡つた、怪しい瓦屋根ばかりである。何時かジヨオンズがさう云つたつけ、最も日本らしい寂しさは、三越の屋上から見下した、限りない瓦屋根に漂つてゐる。何故日本の畫家諸君は。——

私は物音に驚かされた。見ればペンキ塗りの戸口には、不相變青い服を着た、背の低い婆さんが佇んでゐる。婆さんはにやにや笑ひながら、何か私に話しかけるが、嘔の旅行家たる私には、勿論一言も判然しない。私は當惑し切つた儘、やむを得ず顔ばかり眺めてゐた。

すると、開け放した戸の外に、ちらりと花やかな色彩が見えた。水水しい劉海（前髪）、水晶の耳環、最後に繻子らしい薄紫の衣裳——少女は手巾を弄びながら、部屋の中は一瞥も送らず、靜に廊下を通り抜けた。と思ふと又婆さんは、早口に何か饒舌り立てては、得意さうに笑つて見せる、かうなればもう婆さんの來意も、島津氏の通譯を待つ必要はない。私は背の低い婆さんの肩へ、ちよいと兩手をかけるが早いか、くるりと彼女に廻れ右をさせた。

「不要！」

其處へ島津氏が歸つて來た。

その晩私は島津氏と一しよに、城外の酒棧へ出かけて行つた。島津氏は「老酒に酔つた父の横顔」と云ふ、自畫像めいた俳句の作者だから、勿論相當の酒豪である。が、私は殆ど飲めない。それが彼は一時間あまり、酒棧の一隅に坐つてゐたのは、一つには島津氏の徳望の力、二つには酒棧に纏綿する、小説めいた氣もちの力である。

居酒屋は都合二軒見たが、便宜上一軒だけ紹介すると、其處は白壁を左右にした、天井の高い店裏である。部屋突き當りはどう云ふ訣か、荒い格子戸になつてゐたから、夜目にも往來の人通りが見える。机や腰掛けは斜てゐたが、ため塗りのやうに塗つてあるらしい。私はその机の中に、甘蔗の莖をしゃぶりながら、時々島津氏へ御酌をしたりした。

我々の向うには二三人、薄汚い一座が酒を飲んでゐる。その又向うの白壁の際には、殆ど天井につかへる位、素焼の酒瓶が積み上げてある。何でも老酒の上等なのは、白い瓶に入れると云ふ事だから、この店の入り口の金看板に、京莊花雕などと書いてあるのは、きつと大法螺に違ひない。さう云へば土間に寝てゐる犬も、氣味の悪い程瘦せた上に、癩

蓋だらけの頭をしてゐる。往來を通る驢馬の鈴、門附らしい胡弓の音、——さう云ふ騒ぎの聞える中に、向うの一座は愉快さうに、何時か拳を打ち始めた。

其處へ面趣のある男が一人、汚い桶を肩へ吊りながら、我々の机へ歩み寄つた。桶の中を覗いて見ると、紫がかつた臟腑のやうな物が、幾つも渾沌と投げこんである。

「何です、これは？」

「豚の胃袋や心臓ですがね、酒の肴には好いものです。」

島津氏は銅貨を二枚出した。

「一つやつて御覽なさい。ちよいと鹽氣がついてゐますから。」

私は小さい新聞紙の切れに、二つ三つ轉がつた臟腑を見ながら、遙に東京醫科大學の解剖學教室を思ひ出した。母夜叉孫二娘の店ならば知らず、今日明るい電燈の光に、こんな肴を賣つてゐるとは、さすがに老大國は違つたものである。勿論私は食はなかつた。